

下腹ヘルニア七三九例ニ係ル統計的觀察

千葉醫科大學第二外科教室(主任 瀨尾教授)

菊 山 貞 一

【内容抄録】

左記目次ニ據リ記述シ、廣汎ニ互リ枚舉ニ違アラズト雖、總論ニ於テ特筆スベキハ、ヘルニア原因論ノ變遷、鼠蹊及ビ股ヘルニアノ發病年齡調査、近時獨逸ニ於ケル保險醫學ノ進歩ニ伴フ成因ニ據ルヘルニア分類、腸管ヲ内容トスル嵌頓ヘルニアニ於ケル嵌頓機轉ニ據ル分類及ビ嵌頓經過時間(日數)ガヘルニア内容特ニ豫後ニ及ボス影響等ヲ説キ、各論ニ於テハ症例一般ヲ各種類ニ分類細別シ、而シテ先天後天別、内容臟器別、男女別、左右別、豫後及ビ療法等ニ就キ論シ、大腸滑出ヘルニアヲ記載シ、更ニ此等ニ概本本那ニ於ケルヘルニア諸統計及ビ主トシテ最近ニ於ケル歐米諸家ノヘルニア諸統計ヲ比較對照シ、以テ本邦人ヘルニアノ歐米人ノ夫レニ比シ其差異ノ概要ヲ詳カニセント努メタリ。(自抄)

目 次

第一編 總 論

第一章 緒 言

第二章 ヘルニアノ種類

第三章 ヘルニアノ原因

第一節 遺傳的關係

第二節 男女兩性ノ關係

第三節 年齡トノ關係

第四節 左右トノ關係

第五節 腹壓トノ關係

第六節 早産トノ關係

第四章 病理的變化及ビ偶發症

第一節 不還納性ヘルニア

第二節 ヘルニア嵌頓

第一項 ヘルニア嵌頓ノ原因

第一 誘 因

第二 季節トノ關係

第三 年齡トノ關係

第二項 嵌頓ヘルニアノ頻度男女兩性別種類別及ビ左右別

第三項 嵌頓ヘルニア内容及ビ腫痛ノ大サ

第四項 腸管ヲ内容トセル嵌頓ヘルニアノ嵌頓ノ種類

第五項 嵌頓ヘルニアニ於ケル嵌頓後經過時間(日數)ニ伴フ解剖的變化及ビ死亡率

第六項 腸管ヲ内容トセル嵌頓ヘルニアニ於ケル病的變化程度及ビ其死亡率

第七項	腸切除術ヲ施シタル嵌頓ヘルニアニ係ル死亡率
第八項	嵌頓ヘルニアニ於テ遭遇セル死亡ノ死因
第五章	療法
第一節	姑息的療法
第二節	根治手術及ビ其終末結果
第二編	各論
第六章	鼠蹊ヘルニア
第一節	鼠蹊ヘルニアノ種類
第二項	ヘルニア門ノ位置ニヨル分類
第三項	左右及ビ兩側別
第四項	脱出ノ高サニヨル分類
第五項	發生ノ時期ニヨル分類
第五項	内容臟器ニヨル分類

第一編 總論

第一章 緒言

泰西特ニ本邦ニ於ケルヘルニアノ諸文献ニ徴スルニ、余ノ寡聞末ダ同一若干症例群ニ於ケル全般ニ亘ル諸統計ヲ試ミタルモノ甚ダ稀ニ轉タ寂寥ノ感ナシトセズ。又輓近漸次ヘルニア學ノ進歩ヲ來シ、就中第十九世紀末以來ヘルニア發生學說ニ於テ重力的ヘルニア Senkbruch 罹病ニ關シ、體質遺傳ノ說カル、アリ。其他本邦人ニ於ケルヘルニアハ歐米人ノ夫レニ比シ、人種ハ勿論服裝、職業、風俗及ビ習慣等ヲ異ニスルヲ以テ相當差異アルベキヲ思ヒ、余ハ曩ニ自大正九年至同十五年過去七年間千葉醫學專門學校及ビ千葉醫科大學外科教室竝ニ同第二外科教室ニ於テ取扱ハレタル概シテ人口凡ソ百四十萬(男女性ヲ比較スルニ女性約二萬多シ)ヲ有スル千葉縣下ヨリ來レルヘルニア七三九例ニ係ル諸統計ヲ作製シ、此等ヲ主トシテ最近發表セラレタル歐米ノ同統計ニ比較研究セリ。成ルベク煩雜ヲ避クルガ爲メヘルニアニ關スル概念ノ如キハ既ニ一般知悉ノ事實ナルヲ以テ之ヲ省キ、記事ハ可及的簡略ニ記述スルコト、セリ。手術後ニ於ケル經過ノ觀察、其他當調査ニ要セシ保管記錄記載不得要領又ハ脱漏等必要事項ハ、問合狀ニヨリ若シクハ本人

第六項	ヘルニア内容ノ選納如何ニヨル分類
第二節	外鼠蹊ヘルニア合併症
第三節	根治手術及ビ其終末結果
第七章	腹ヘルニア
第一節	男女兩性別及ビ左右別
第二節	根治手術及ビ其終末結果
第八章	臍ヘルニア
第九章	腹ヘルニア
第十章	會陰ヘルニア
第十一章	内ヘルニア
第十二章	大腸滑出ヘルニア
第十三章	總括

原 著 菊山 下腹ヘルニア七三九例ニ係ル統計的觀察
 一四一三 (六六)
 ノ來訪ヲ受ケ、場合ニヨリテハ患家訪問ヲ行ヒ直接之ガ檢診ヲナシ、且ツ詳細ニ問合ハセ以テ誤謬ヲ避クルニ努メタ
 リ。

第二章 ヘルニアノ種類

第一表

鼠 蹊 ヘル ニ ア (男子)									種 類	年 次
兩 側			右			左				
計	入 院	外 來	計	入 院	外 來	計	入 院	外 來		
20	右(3)左(5)	五	72	二 八	四 四	23	一 〇	一 三	年九正大	
12	(4)四(4)	二	53	二 三	三 一	31	一 六	一 五	年十同	
8	(2)三(2)	一	40	一 八	二 二	21	七	一 四	年一十同	
6	(2)二(2)	一	41	二 八	一 三	12	七	五	年二十同	
8	一(1)	三	47	三 〇	一 七	22	一 六	六	年三十同	
18	(2)五(4)	四	15	四 六	一 九	26	一 八	八	年四十同	
22	(6)九(9)	二	42	二 六	一 六	30	二 一	九	年五十同	
94	58	36	360	198	162	165	95	70	計	

第一表記載ノ如ク、ヘルニア七三九例中鼠蹊ヘルニア(男子)六一九例八三・七六%、同(女子)七五例一〇・二五%、股ヘルニア二〇例二・七一%、臍ヘルニア一六例二・一七%、腹ヘルニア七例〇・九五%、會陰及ビ内ヘルニア各一例〇・一四%ヲ算シ、即チ外ヘルニア七三九例九九・八七%、内ヘルニア一例〇・一四%ナリ。而シテ第二表ニ示スガ如ク鼠蹊ヘルニアハ男女兩性ヲ合シ六九四例九三・九一%ニシテ、村主氏ノ九一・八三%ニ比シ二・〇八%多ク、Coley, B. L. ノ九三・一%ニ比シ〇・八一%多ク、Carl Garre 及 A. Borcard ノ八五%ニ比シ著シク多ク約九%ノ差アリ。股ヘルニアハ村主氏ノ五・四五%ニ比シ約半數ニ相當シ、Coley, B. L. ノ三・三七%ニ比シ一・三三%少ク、Carl Garre 及 A. Borcard ノ八乃至一〇%ニ比シ著シク少ク約三分ノ一弱ニ相當ス。臍ヘルニアハ臍帶ヘルニアヲ除キ機能障礙及ビ嵌頓

ア ニ ル ヘ 股							鼠蹊ヘルニア合計	(子 女) ア ニ ル ヘ 蹊 鼠								
合 計	右			左				兩 側			右			左		
	計	入院	外來	計	入院	外來		計	入院	外來	計	入院	外來	計	入院	外來
2				2	二		132	2	右 (1) 左 (1)		9	三	六	6	四	二
							109	4	(1)-(1)	—	3	二	—	6	一	五
1	1		一				72				2	二		1		一
3	3	一	二				67				5	三	二	3	二	一
4	2	二		2	二		88	2		—	6	四	二	3	二	一
6	5	四	一	1		一	120				3	一	二	8	六	二
4				4	四		106				1	一		11	六	五
20	11	7	4	9	8	1	694	8	4	4	29	16	13	38	21	17

等頗ル稀有ニ屬シ、從ツテ受診患者尠少ニシテ、余ノ二・一七%ニ對シ村主氏ハ一・九五%、Coley, B. L. ハ一・八%ニシテ共ニ稍少ク、Carl Garre 及ビ A. B. Orchard ハ三%ニシテ稍多シ。爾他諸種ヘルニアハ其發生各少數プロセントヲ有スルニ過ギズ。Willstein ニ據レバ鼠蹊ヘルニアハ其頻度男子ハ女子ニ十倍シ、又鼠蹊ヘルニアハ股ヘルニアノ略々八倍ニ當ルト。

總計	内ヘルニア	會陰ヘルニア	腹			臍		
			ヘルニア		白線(上腹)	ヘルニア		小兒臍
			計	側腹	ヘルニア	計	先天性臍	ヘルニア
	入院	入院		入院	外來		入院	外來
137	一		1		一	2	一	一
115			2		二	3		三
76						3		三
75			2	二		3		三
94			1	一		1		一
127						1		一
115		一	1	一		3		三
739	1	1	7	4	3	16	1	15

備考 一、患者總人員六七九名ニシテ側腹ヘルニア二例及臍ヘルニア七例ハ他ノ下腹ヘルニアニ併發シタルモノトス。
二、鼠蹊ヘルニア(男子) 癩大正十年右項括弧内一ハ腹膜前鼠蹊ヘルニアトス。
三、鼠蹊ヘルニア 癩括弧内亞刺比亞數字ハ其手術例數ヲ示ス。

第三章 ヘルニアノ原因

第一節 遺傳的關係

ヘルニアノ成立ニ關シ Waldeyer, Bier, Thole, Thiem, Kaufmann 及ビ Liniger 等諸氏ノ業績及ビ意見ハ、解剖學的形態學的立脚點ヨリ其解決ニ曙光ヲ認メツ、アリ。特ニ動力的ヘルニア Gewaltnuch ニ就キテハ、其發病ニ此解剖學的の見地ヨリ充分ナル説明ヲナシ得ルモ、重力的ヘルニア Senknuch ニ向ツテハ然ラズ。

Lindenstein (一九〇八年) ニ據レバ、上腹ヘルニアノ發生ハ外傷若シクハ急激ナル羸瘦ノ結果ニ由ルニアラズシテ

第 二 表

報 告 者	種 類	總 數	菊 山	村 主 氏	Coley, B. L. (米)	Carl Garre u. A. Borchard (獨)	備 考
	鼠 蹊 へ アニル	六九四	93.91	二二六	91.83	85	一、亞刺比亞數字ハ同百分率ヲ示ス
	股 へ アニル	二〇	2.71	一四	5.45	8-10	
	臍 へ アニル	一六	2.17	五	1.95	3	
腹ヘルニア	白線 上へ 腹へ アニル	三	0.41	二	0.77	0.47	爾他諸種ヘルニア型ハ各少數「プロセント」ヲ有ス
	側 へ アニル	四	0.54			1.27	
會 陰 へ アニル		一	0.14				
	内 へ アニル	一	0.14				

腹壁及ビ筋膜ノ先天性衰弱ニ基ツク。夫故ニ上腹ヘルニアハ亦屢々他種ヘルニアト合併スト。

Leser, Berger 前防氏等ハヘルニアノ發病ニ遺傳的關係ノ存スルヲ認メ、三輪博士ハ之ヲ疑フ、Leser ハヘルニア全數ノ三分ノ一ニ於テ其發病ニ遺傳ヲ證明セラルトナシ、Berger ハヘルニア患者七五四二例中二〇七九回二七・五七%ニ於テ其遺傳的關係アルヲ證シ、余ハ其六二二人中一三九人二二・三五%ニ其血族中之ヲ徵セリ。(第三表參照) Cevario, Luigi (一九二一年)ニ據レバ、ヘルニア囊二個ノ出現竝ニ八人ノ家族中五人ノヘルニア罹患者ヲ見タル事實ハ、其原因トシテ一般結締組織衰弱ニ由ルト。

M. zur Verth (一九二六年)ニ據レバ、重力的ヘルニアハ體質的疾疾ナリ。而シテ第

十九世紀末既ニ獨乙ニ於テ Bier 及ビ Vogel ニヨリ初メテ此異常體質ハ結締組織衰弱型體質(往時ノ所謂ヘルニア素因)ナルヲ知ラレ、其著明ナルモノニ於テハ負擔畸形特ニ外翻足、靜脈怒張、ヘルニア、精系靜脈瘤、内臟下垂及ビ懸垂腹等屢々併發シ遺傳性ヲ有スト。Vogel ハ略々二十七年前行ケルニ於ケル臨時保護者及ビ廢兵收容所ニ收容セラレタル住民三〇五人(多クハ高年者)ヲ檢診シ、二一人ノ結締組織衰弱型ニ固有ナル體質者ヲ見、而シテ結締組織衰弱型男子一〇八人中八四回七七・七八%、同女子一〇三人中三九回三〇%ヘルニアニ罹病シアルヲ見、尙工業界ニ於ケル幼少結締組織

第三表

大			年 九 正 大												次 年				
父	母方祖父及妹一	父方祖父及従父弟一	計	姪ノ長男一	同胞五人中三	兄弟姉妹	弟各一	兄各一	子各一	母	父及従兄弟二	父	母方祖母	父方祖父	父方曾祖父	母方先代一及祖父	柄續ノト者患 數者患罹其ビ及	アニルヘニ族血其 ルス有ナ者患罹 數者患アニルヘ	要 摘
一	一	一	二三	一	一	一	四	三	二	二	一	二	一	三	一	一			
					本人ヲ含ム、患者ハ五男														

衰弱型體質者ノ檢診ヲ行ヒ、亦同様ナル關係ノ存スルヲ發見シタリ。

余ハ前記ヘルニア患者六二人ヲ動力的ヘルニアヲ有スルモノ及ビ重力的ヘルニアヲ有スルモノニ區分シタルニ、前者一四八人後者四七四人ニシテ、其血族中ヘルニア患者ヲ有スルモノ前者一二人八・一一%、後者一二七人二六・七九%ナルガ、重力的ヘルニアヲ有スルモノニシテ其血族ニヘルニア罹病者ヲ有スルモノ、數ハ動力的ヘルニアヲ有スルモノニシテ其血族ニヘルニア罹病者ヲ有スルモノ、夫レニ比シ約三・三倍ニ達シ、尙重力的ヘルニアヲ有スルモノハ其血族ニ往々數名ノヘルニア罹病者ヲ有スルモノアリ。亦以テ重力的ヘルニアノ體質的疾疾ニシテ遺傳性ヲ有スルヲ察知シ得ベク、Vogel 氏說ニ賛スルモノナリ。

第二節 男女兩性ノ關係

一般ヘルニアニ於テ男子ノ之ヲ患フルコト女子ニ比シ著シク多ク、Malgaigne ニ據レバ男性ハ女性ニ四倍ス。是レ男子ニハ鼠蹊ヘルニア多キノ故ニ歸セリ。斯ク鼠蹊ヘルニアハ女子ニ少ク男子ニ多キハ鼠蹊部構造如何ニ由ルハ既ニ知悉セラレタル所ナリ。Wulstein ニ據レバ鼠蹊ヘルニアハ好シ

大			大 正 十 一 年									大 正 十 年											
母方祖父	父方祖父及兄	父方曾祖父及父	計	從兄弟姊妹(他ノ一ハ二)	伯叔父一	孫一	弟一	兄一	子一	父	母方祖父	叔父一	父方祖母父方叔父三及母方叔父一	父方祖父	計	從姊妹一	母方叔父一及母方從姊妹一	兄弟姊妹一	姉一	弟各一	兄各一	子各一	母及母ノ弟一
二	一	一	一六	二	一	一	一	一	一	五	一	一	一	二	二四	一	一	一	一	七	六	三	一
									男性				父方同胞七人									一ハ女性	

デ男子ニ來リ、特ニ勞働者階級ニ多ク屢々十倍ニ達シ股ヘルニアハ女子ニ多シ、余ノ調査ニ據レバ男子ヘルニア六三九例中鼠蹊ヘルニア六一九例、股ヘルニア四例、臍ヘルニア九例、腹ヘルニア五例、會陰及ビ内ヘルニア各一例ヲ算シ、女子ヘルニア一〇〇例中鼠蹊ヘルニア七五例、股ヘルニア一六例、臍ヘルニア七例及ビ腹ヘルニア二例ヲ計上シ、男性ハ女性ニ六倍強ナリ。

第三節 年齢トノ關係

嚴正ナル意義ニ於ケル先天性ヘルニア即チ子宮生活中ニ於テ完成セルヘルニアハ、臍帶ヘルニアハ勿論亦屢々横隔膜ニ於テ見ラレ、尙稀ニ外鼠蹊ヘルニアニ於テ見ラル、コトアルモ、余ノ調査ニ據レバ嚴正ナル意義ニ於ケル先天性ヘルニアハヘルニア七三九例中男子鼠蹊ヘルニア七六例、女子鼠蹊ヘルニア六例及ビ臍帶ヘルニア一例、計八三例一二・九九%ヲ有シ、鼠蹊ヘルニアハ其大多數先天性ニ屬スルヲ以テ其年齡上ノ關係第一歳ニ於テ發病最高率ヲ占メ後第十五歳若シハ春機發動期迄急減シ、而シテ更ニ徐々ニ増加スルハ一般ニ認メラル、所ナルモ (Griser, Leser u. a.) 第四表記載ノ如ク余ノ鼠蹊ヘルニア六八六例ニ係ル發病

大				年 三 十 正 大										年 二 十 正								
父	祖母一	母方祖父及子一	母方祖父	計	兄ノ子一	弟各一	兄各一	子各一	母及弟一	父及母方叔父一	父	母方祖母及父方祖父ノ兄一	祖父	父方祖父	計	母方祖母ノ弟一及母ノ弟一	父方祖父ノ姉	伯父一	母ノ兄、弟各一及長男	弟各一	長男一	父及父方姉妹一
一	一	一	二	一八	一	五	三	二	一	一	一	一	一	二	一三	一	一	一	一	三	一	一
		子ハ男性			男性			一ハ男性ニシテ三男														

年齢調査ニ於テハ、第一歳以内ノ發病四五・六三%ヲ算シ、Greshノ第一歳ニ於ケル發病七分ニ比シ著シク少ク、高年ニ於テ其發病増加セザルノミナラズ却ツテ減少ノ狀ニアリ。股ヘルニアハ後天性ニ發シ、其發病年齢前記二〇例中最年少者滿二九年最高年者滿六一年ニシテ四〇年代最多ク一二例ヲ占メ、平均發病年齢四三・四年ナリトス、又女子ヘルニア(主ニ鼠蹊及ビ股ヘルニア)ニ於テ獨乙婦人ノ夫レト比較スルニ其發病年齢ニ著シキ差異アリ。第五表ニ示スガ如ク獨乙婦人ニ於テ壯年及ビ中年ノ婦人ニ多發スルハ獨乙多數ノ學者ハ主トシテ其誘因妊娠ニアリト論ジ、四戸氏ハ最大原因及ビ誘因トシテコルセットヲ舉ゲ、且ツ妊娠ノ外春機發動期ニ際スル骨盤部臟器ノ變化モ亦其發病ヲ助クルモノニハアラザルカト疑ヘルモ、余ハ腫部高キ婦人用靴ノ穿用ガ非常ニ腹壓ヲ増強セシメ、コルセット裝用(歐州大戰後ハコルセットヲ用ヒズト云フ)ト相俟ツテヘルニアヲ起ス最大誘因ナリシト考フ、蓋シ該靴ノ穿用ニヨリ姿勢特ニ脊桂ノ彎曲度ニ變化ヲ來シ、爲ニ平衡ヲ保タントシテ自然努力ノ結果反身ノ狀ヲ呈スベク、之ニ因シ他動的ニ腹壓特ニ腹筋ノ異常緊張ヲ發シ腹腔ノ過

大 正 十									年 四 十 正													
伯父一	弟各一	兄一母ノ兄ト其子各一	兄一及父方從兄一	兄各一	子各一	父	母方祖父	父方祖父	計	叔母ノ子一	父ノ妹ノ子一及母ノ弟ノ子一	父方從兄一	兄ノ子一	甥一	叔父一	同胞二	妹一	弟一及姉ノ長男一	弟各一	兄各一	子一	父及弟二
一	三	一	一	四	四	二	三	二	二〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	一
					一ハ男性ニシテ四男						何レモ男性		女性			同胞七人						同胞五人

充ヲ來シ腹壓ノ増強ヲ招來スベシ。又獨乙婦人ニ於テ幼少ニ際シ其發病稀ナルハ注目ニ値ス。

小兒臍ヘルニア一五例中七例ハ臍ヘルニア發生ニ概ネ素因ヲ有スル生後（臍帶脫落後）一ヶ月以内ニ發病シ、他八例ハ夫レヨリ六ヶ月以内ニ發病セルガ、爾他各種ヘルニアハ其發生ニ特記スベキ年齡的關係ヲ有スルモノナシ。

第四節 左右トノ關係

一般ヘルニア中其大多數ヲ占ムル先天性外鼠蹊ヘルニアハ所謂 Waldeyer 氏ヘルニア囊素因ニ據リ右側ニ多シ、又小腸ニ於ケル腸間膜ハ左側ニ短ク右側ニ長シ。是レ亦右側ヘルニアヲシテ多カラシムル素因トナル。故ニ一般ヨリ論ズレバ右側ヘルニアハ左側ヘルニアヨリ甚ダ多シ。余ノ調査セル鼠蹊ヘルニア六四三人、股ヘルニア二〇人、側腹ヘルニア四人、會陰及ビ内ヘルニア各一人、計六六九人中左側ヘルニア二二三人三一・八四%、右側ヘルニア四〇五人六〇・五四%、兩側ヘルニア五一八七・六二%ヲ算シ、其左右側發生ノ比一對一・七三ナリ。

更ニ兩側外鼠蹊ヘルニア五九例（受診若シクハ退院後他側發病シ兩側トナリシモノ八例ヲ含ム）

年	五				總計
	叔父一	母ノ妹一	從兄一	父方祖母ノ兄一	
計	一	一	一	一	二五
總計	一三九				

備考 一、ヘルニア患者六百二十名中其續柄ニヘルニア患者ヲ有スルモノ一三九名アリ、即チ二二・三五%ヲ算ス。
二、表中「及」ヲ以テ連結セラレアルハ同一患者ノ續柄ニ發セルヘルニア患者ナリ。

七人六八・三八%、Coley, B. L. (米) ハ二二八八人中六〇六人二六・四九%ヲ算セルヲ報ジ、歐米人ハ本邦人ニ比シ兩側ヘルニア甚ダ多ク彼我雲泥ノ差アリ。

第五節 腹 壓 ト ノ 關 係

腹壓ガヘルニア發病ニ唯一ノ原因タルコトハ一般ニ知悉セラル、所ナリ。動力的ヘルニア Cevaldbruch ハ余ノ調査セル白線ヘルニア二例及ビ内ヘルニア一例ヲ除ケルヘルニア七三六例中一八二例二四・七三%ヲ有シ、Berger ノ同四六三一例中一四二七例三〇・八%ニ比シ著シク少シ。鼠蹊及ビ股ヘルニアニ係ル動力的ヘルニアニ於テハ前記七三六例中一六六例二二・五五%ニシテ、Berger ノ同四六三一例中一三三八例二九・九七%ニ比シ其差亦然リ。災難又ハ不運ヘルニア Unfallbruch ハ前記動力的ヘルニア一八二例中三〇例一六・四八%ニシテ、Berger ノ同一四二七例中六乃至七%ニ比シ約二倍半ノ多キニ相當ス。

獨乙ニ於テハ近時保險醫學ノ進歩ニ伴ヒ屢々成因ニ據ルヘルニア分類法ニヨリテ一般ヘルニアヲ分類セラレ、現ニ獨乙國保險裁判所ニ於テ採用セラレアルハ Paalzow 氏ヘルニア分類法ニ因ミタルモノナルガ、Rissbruch, Pressbruch 及 Senkbruch ノ三種ニ分類セラレ、前二者ハ法規ニ抵觸ザル限リ當局ニ於テ賠償ノ義務アルモノトス。Rissbruch ハ

ニ就キ各發病時期相互關係ヲ調査セシニ、嚴正ナル意義ニ於ケル兩側共ニ先天性ニ起レルモノ一例一八・六四%、兩側同時ニ起レルモノ五例八・七四%、左側ヨリ先ニ起レルモノ二五例四二・三七%、右側ヨリ先ニ起レルモノ一八例三〇・五七%ニシテ、左側ヨリ先ニ起レルモノハ右側ヨリ先ニ起レルモノニ比シ著シク多キモ是レ偶然ノ結果ナラン。又兩側ヘルニアニ就キ諸文献ニ徵スルニ、三輪博士ハ三二五人中一〇人三・〇七%、村主氏ハ八%、Berger (獨) ハ六九五七人中四七五

[illegible]

一%、(二)八九%、(三)八九〇%ヲ計上ス

第六節 早産ノ關係

ヘルニアが結締織衰弱型體質者ニ多發スル以上、猶未熟ノ狀態ニテ生産セル早産兒ニヘルニア罹患者ノ比較的多カルベキヲ思ヒ、一般ヘルニア六二二例中早産者三七例（妊娠月數八ヶ月四例、九ヶ月二〇例、十ヶ月一三例）九・九五%ヲ見タリ。

第四章 病理的變化及偶發症

大別シテ不還納性ヘルニア及びヘルニア籐頓トス。

第一節 不還納性（不動性）へルニア

ヘルニア内容相互或ハヘルニア嚢トノ癒着ニ由リテ起ル。白線ヘルニア二例ヲ除ケルヘルニア七三七例中七例〇・九五%ヲ有シ、左陰嚢ヘルニア一例、右陰嚢ヘルニア二例、左股ヘルニア二例及び右股ヘルニア二例ニシテ、腫瘤ノ大サハ胡桃大、小兒手拳大、雞卵大等種々ナリ。

Berger 410000 例中五八二例五・八二%、Niedlich 八九一一

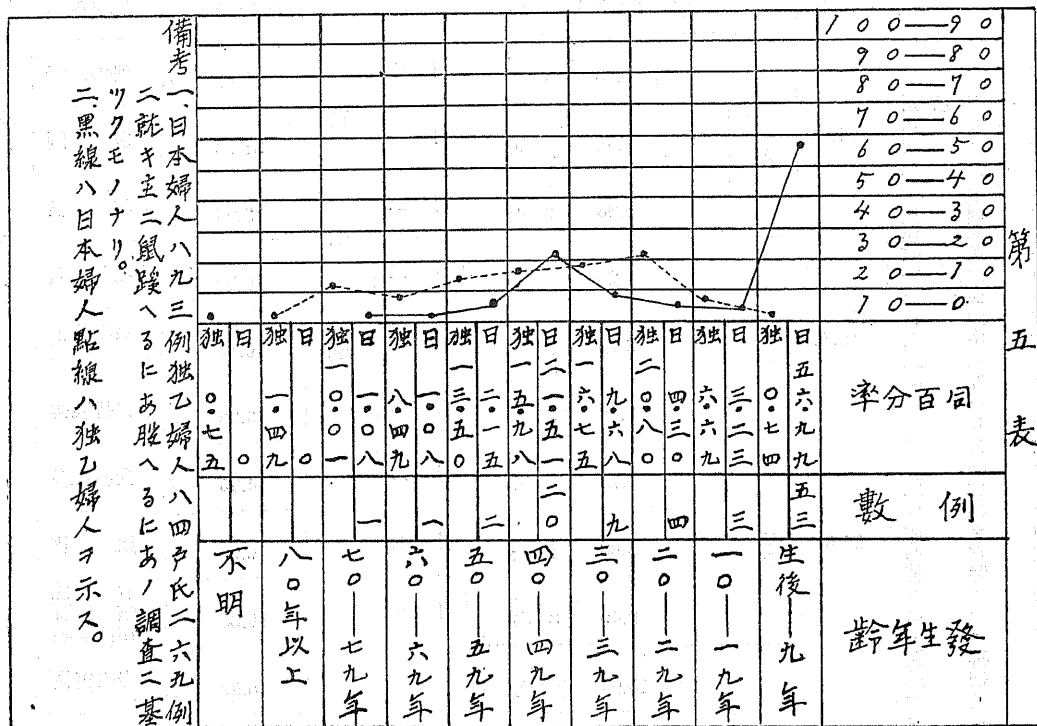
例中九例〇・九九%ノ不還納性ヘルニアヲ見タリト報ゼリ

第二節へルニア簞頓

第一項 ヘルニア 筋頓ノ原因

第一誘因

ヘルニア患者ヲシテ腹壓ヲ急激ニ増強セシメ、矢嘔症ヲ誘起スルハ、余ノ矢嘔ヘルニア一〇一例ニ於ケル調査ニ據ルニ第六表ニ示ス。



ガ如ク、小兒箠頓症ニハ主トシテ號泣、感冒、流行性感冒或ハ百日咳ニ於ケル咳嗽頻發、其他消化不良症或ハ胃腸加答兒ニヨル頻回ノ排便時ニ於ケル努責等ガ誘因トナリ、大人ニハ劇動ガ誘因トナルハ敢テ贅言ヲ要セズ、糞便性箠頓ニ陷ルニ先チヘルニア帶不使用、便秘等ガ其誘因トナリタルモノ又屢見受ケラル。

第二 季節トノ關係

箠頓ヘルニア一八九例ヲ月別及季節別ニ調査シタルニ、第七表ニ記載セル如ク秋季ニ發病最多ク全數ノ三分ノ一以上ヲ占メ、特ニ九、十月ニ於テハ大人ノ農繁期ニ於ケル劇動其他諸種作業ニ因スル箠頓症夥シク、冬季ニ於ケル發病之レニ亞ゲルガ、其主要ナルモノハ小兒ノ感冒、流行性感冒、或ハ百日咳ニヨル咳嗽頻發ニ因スル發病、竝ニ寒冷其他ニヨル號泣ニ基ヅク罹病ヲ舉グベク、夏季ニ於テハ消化不良症又ハ胃腸加答兒ニヨル頻回ノ排便ニ因スル發病亦比較的の多ク、閑農期タル春季ニ於テハ其發病最少シ。蓋シ千葉縣下ハ主トシテ農業地ナレバ農ノ繁閑ハヘルニア箠頓症

第 六 表

率分百同	例數	機動頓簇
17.82	一八	叫喚泣啼
21.78	二二	動 劇
3.96	四	業 輕
0.99	一	物見力角
10.89	一一	良不化消症
6.93	七	尿排便排
4.95	五	食多飲多
0.99	一	尿 排
10.88	一一	感冒發作 咳嗽日百
0.99	一	奏吹笛橫
1.98	二	テレハ負 迫壓腹下
0.99	一	慣習ム力
0.99	一	傷 外
3.69	四	アニルヘ 去 除 帶
11.88	一二	明 不

第 七 表

率分百同	例數	別 月
8.40	(3) 〇	月二十
7.64	九	月 一
5.88	(2) 七	月 二
4.20	(1) 五	月 三
6.72	(3) 八	月 四
8.40	(2) 〇	月 五
6.72	八	月 六
5.88	(1) 七	月 七
8.40	(3) 〇	月 八
15.96	(6) 九(一)	月 九
15.13	(4) 一八	月 十
6.72	八	月 十

備考 一、括弧内亞刺比亞數字ハ自然還納若シクハ整復術其他ニ由リ還納シタル内數ヲ示ス。
二、五月ニ括弧内亞刺比亞數字以外一旦自然還納シ暫時ニシテ再發頓シタルモノ一例アリ。
三、九月括弧内一ハ手術前虚脱ニヨリ死亡シタル内數ヲ示ス。

發生ノ消長ニ大ナル關係ヲ有ス。

又氣溫ハヘルニア簇頓ニ際シ自然還納若シクハ整復術ニ由ル還納ニ大ナル影響ヲ有スルヲ察知スルヲ得。冬季ハ一旦簇頓スルヤ寒冷ノ刺激ニ由リ簇頓輪ニ及ボス絞扼作用ヲシテ一層助長セシメ、整復術ヲ行フニ還納ヲ難カラシムベシ。今前記一一九例ニ就キ一年ヲ通ジ低溫季節(一、二、三、四、十一及十二月)及高溫季節(自五月至十月)ノ二

季ニ分チ、其還納率ヲ調査スルニ、前者ハ四七例中九例一九・一五%、後者ハ七二例中一六例二三・二九%ヲ算シ其差著シ。

而シテ自然還納若シクハ整復術其他ニ由リ還納シタル二六例中五例一八・二三%ハ前者ニ屬シ、一八例六九・二三%ハ整復術ニ由リ還納シ、一例ハ審法、他二例ハ溫浴ナル整復補助法ニヨリ還納シタルモノナリ。自然還納ハ五月ニ一

第 八 表

年 齡	例 數	同 百分率
自一歲 至一〇	六五	59.63
自一一 至二〇	八	7.39
自二一 至三〇	一一	10.09
自三一 至四〇	九	8.26
自四一 至五〇	六	5.50
自五一 至六〇	四	3.70
自六一 至七〇	四	3.70
自七一 至八〇	一	0.92
自八一 至九〇	一	0.92

例、八月ニ一例、十月ニ三例
ニシテ寒冷ノ季節ニ於テセル
モノナク。審法ニヨルモノハ
七月ニ一例、溫浴ニヨルモノ
ハ九及十月ニ各一例ナリ。

第三 年 齡 ト ノ 關 係

余ノ調査シタル箠頓ヘルニア一〇九例ニ據レバ第八表ニ記載セルガ如ク、一〇歳以下ニ於ケル發病其過半數ヲ占メ、二〇歳代之レニ次グ。老ユルニ從ヒ漸次減少ス。是レ一〇歳以下ノ小兒ニ在リテハ主トシテ號泣、感冒、流行性感冒、或ハ百日咳ニヨル咳嗽頻發、消化不良症、又ハ胃腸加答兒ニ因ル頻回ノ排便時ニ於ケル努責等ガ急劇ニ腹壓ヲ充進セシメ、以テヘルニア箠頓ノ誘因トナリ、二〇歳代以後特ニ二〇歳代ニ於テハ農業ニヨル劇働ガ箠頓症ヲ誘起セシムル異常ナル腹壓增強ノ因ヲ爲セルモノ多シ。前防氏ノ箠頓ヘルニア三八例ニ係ル發病年齡的消長亦余ノ統計ニ一致ス。

第二項 箠頓ヘルニアノ頻度男女兩性別種類別及ビ左右別

ヘルニア七三九例中箠頓ヘルニア一一九例一六・一〇%アリ。男子一〇五例女子一四例、即チ男女兩性ノ比七・五對一ニシテ、前記一一九例ヲ更ニ各種類ニ分タバ、箠頓鼠蹊ヘルニア一〇九例（同腹膜前鼠蹊ヘルニア一例ヲ含ム）九一・六〇%、同股ヘルニア七例五・八八%、同臍帶ヘルニア同會陰ヘルニア及ビ同内（盲腸後）ヘルニア各一例〇・八三%ナルガ、主トシテ整復術ニヨリ還納シタルモノ二五例、未ダ手術セザルニ先ダチ虚脱ニヨリ死亡シタルモノ一例、緊急手

術 Notoparation ヲ行ヒタルモノ九三例ヲ算ス。左右側ニ於ケルヘルニア(鼠蹊、股及ビ會陰ヘルニア) 箵頓ノ頻度ヲ比較スルニ、左側ハヘルニア二五三例中箵頓ヘルニア四四例一七・三九%、右側ハ同ジク四五二例中七三例一六・一五%ヲ算シ、箵頓率左側ニ多シ。

前記箵頓ヘルニア一一九例中一六例一三・四五%、箵頓鼠蹊ヘルニア一〇九例中一三例一一・九三%及ビ箵頓股ヘルニア七例中一例一四・二九%ノヘルニアヲ發シ、其餘波同一原因及ビ誘因ノ下ニ直チニ箵頓シタルモノナリ。
村主氏ヘルニア二五七例中二八例一〇・八九%、Alipow, G. 同 一三三例中一七四例一四・一%ノ箵頓ヘルニアアリシヲ報告シ、且ツ後者ニ據レバ其一二四例中男子一五一例女子二三例即チ男女兩性ノ比七・七對一ナリキト。
Kingdom ニ據レバ百例ノ箵頓中ニ於テ四例四%ハ初メテヘルニアヲ起シ直チニ箵頓シタルモノナリキト云ヒ、Thema, Bryant (一八六一年) ハ鼠蹊ヘルニアニ於テハ其五・七%、股ヘルニアニ於テ其四四%ハ初メテ脱出シ箵頓シタルモノナリキト報シ、Hatchinson Jackson (一八六一年) ハ箵頓ヘルニアノ二五%ハ箵頓前本病ヲ注意セザリキト云ヘリ。

第九表

種 類	例 數	内 容
臍帶ヘルニア	一	肝小腸及大腸
鼠蹊ヘルニア	八三	小腸六八、盲腸六 盲腸及蟲様突起二 盲腸蟲様突起及廻腸二 盲腸及廻腸二 此等ニ大網膜ノ混セル アリ然ラザルアリ 大網膜四
股ヘルニア	七	何レモ小腸
會陰ヘルニア	一	廻腸
内(盲腸)ヘルニア	一	廻腸

第三項 箵頓ヘルニア内容及ビ腫瘤ノ大サ

第九表及ビ第一〇表ニ記載セルガ如ク、箵頓ヘルニア九三例中内容トシテ小腸其大多數ヲ占メ、大腸及ビ大網膜特ニ大網膜ガ單獨ニ内容トシテ來ルハ少シ。本邦人ハ大腸滑出ヘルニア泰西人ニ比シテ遙カニ多キガ故ニ(第十二章大腸滑出ヘルニア參照)、大腸單獨ニ其内容タル場合亦泰西人ヨリ多カルベシ。Carl Garre 及 A. A. Borchardt ニ據レバ、箵頓ヘルニアニ於テ大網膜單獨ニ其内容トシテ來ルハ五%ナリト云フ。歐州人ニ於テハ内容トシテ大網膜單獨ニ來ルハ大腸ガ單獨ニ内容トシテ來ルヨリモ遙カニ多シ。

第十表

摘 要	同百分率	實 數	内容ノ種類	嵌頓ヘルニア 總數	容 内 者告報
大腸ノミセ、即チ七・五三% 小腸及大腸ヘルニアニ大網膜ノ混 セルアリ、然ラザルアリ、 又大腸ニ混シタル小腸下部ハ之ヲ 除ケリ、	82.80	七七	小 腸	九三	山 菊
	12.90	一二	大 腸		
	4.30	四	大網膜		
小腸ノミ六〇% 小腸及大網膜二四% 大腸ノミ二・七% 大網膜全体ニテ三五・六%	84.7	五一	小 腸	六〇八	Hilgenreiner
	5.8	三五	大 腸		
	9.5	五八	大網膜		

第四項 腸管ヲ内容トセル嵌頓ヘルニアノ嵌頓ノ種類

余ノ調査シタル腸管ヲ内容トセル嵌頓ヘルニア一〇五例中其發生原因ニ從ヒ分類スルニ、其當初主トシテ糞便性嵌頓ト認ムベキモノ五三例、彈力性嵌頓若シクハ主トシテ彈力性嵌頓ト認ムベキモノ五二例ヲ算シ、兩者間其發生率ニ大差ナシ。爾後ノ經過ニ於テ勿論其兩機轉通例合併シ來レルハ言フ俟タズ。Wullsteinハ嘗テ彈力性嵌頓ハ比較的稀ナリト云ヒシモ、醫學進歩シ衛生思想一般ニ普及シ根治手術好シデ行ハレ、又根治手術ヲ行ハザルヘルニア患者ニ在リテハ概ネヘルニア帶ヲ裝用セラル、現今ニ於テハ、糞便性嵌頓ハ漸次減少シツ、アルハ明カナル事實ナリトス。解剖的特種型トシテ鼠蹊管ニ於ケル睾丸嵌頓及ビ逆行性嵌頓ハ之ヲ認メザリシモ、腸壁ヘルニア六例及ビ大網膜ヘルニア四例アリ。

嵌頓ヘルニア九四例（整復術ニヨリ還納シタルモノヲモ含ム）ニ於テ其腫瘤ノ大サヲ調査セシニ、雞卵大三三例三五・一一%ヲ最多トシ、三分ノ一以上ヲ占メ、之ニ亞グハ鷄卵大二六例二七・六六%、手拳大一〇例一〇・六四%、小兒頭大九例九・五七%及ビ小雞卵大六例六・三八%ノ順ニシテ、少ナキハ鳩卵大三例三・一九%、大雞卵大二例二・一三%、大鷄卵大、鷄卵二倍大、手拳一倍半大、手拳小兒頭大ノ半及ビ小兒頭大各一例一・〇六%ナリトス。

腸壁ヘルニア 嵌頓ヘルニア九三例中腸壁ヘルニア (Ritresche Hernie) 六例六・四五%アリ。同症例中三例内容タル腸管壞疽トナリ、二例腸管尙壞死セザルモ大網膜壞疽トナリテ死亡一例一六・六七%ヲ算シ、Hilgenreinerハ腸壁ヘルニア三四例中一六例四七・〇六%、Busseハ同三三例中一四例四二・二七%、G. Brunsハ同三九八例中一四七例三六・七%、Bonnerハ同三一一例中四例一二・九%ノ多キ死亡率ヲ報ジタリシニ反シ、Kosgreewハ其一六例ニ於テ總テ腸切除後側々吻合術ヲ行ヒ全患者悉ク治癒シタリト報告セリ。Carl Garre 及 A. Borchardハ腸壁ヘルニアハ一般ニ股ヘルニアニ成立シ、E. Graser 亦主トシテ股ヘルニア及ビ閉鎖ヘルニアニ成立シ稀ニ鼠蹊ヘルニアニ觀察セラルト云ヒシモ、余ノ六例ハ股ヘルニアニ成立シタルモノ三例、完全鼠蹊ヘルニアニ形成シタルモノ二例及ビ陰囊ヘルニアニ發見セラレタルモノ一例是レナリ。Hilgenreinerハ其三五例中一九例ハ股ヘルニアニ、一三例ハ鼠蹊ヘルニアニ、二例ハ臍ヘルニアニ、一例ハ閉鎖ヘルニアニ成立シアリタリト報ゼリ。

嵌頓大網膜ヘルニア 嵌頓ヘルニア九三例中同大網膜ヘルニア四例四・三〇%ヲ見タリ。Carl Garre, A. Borchard 及 Graser 等ハ其頻度嵌頓ヘルニアノ五%ナリト云ヒ、Hilgenreinerハ嵌頓ヘルニア六〇八例中同大網膜ヘルニア五八例九・五ヲ見タリト。Carl Garre 及 A. Borchardニ據ンバ嵌頓大網膜ヘルニアハ股ヘルニア、臍ヘルニア及ビ白線ヘルニアニ現ハルト記載セラレアルモ、余ノ四例ハ何レモ鼠蹊ヘルニア (男子三、女子一)ニ内容トシテ大網膜單獨ニ其出現ヲ來シタルモノナリ。嵌頓大網膜ヘルニアハ其症候同腸管ヘルニアニ比シ輕易ナリト稱セラレ、余ノ四例(嵌頓經過日數各三日、四日、五日及ビ一〇日)中三例ハ其嵌頓經過中嘔吐ヲ見ズ、尙嘔吐ヲ有スル一例ニ在リテモ便通及ビ風氣ハ平常ノ如ク存シタリキト、女子ノ一例ハ二日前來嵌頓シ腫瘤大鳩卵大疼痛アリ、輕熱存シ腹部緊張シ食欲缺如ス。手術ニ際シ大網膜鬱血ヘルニア水濁濁等ヲ認メ、術後汎發性腹膜炎ヲ發シ八日ニシテ死亡ス。

第五項 嵌頓ヘルニアニ於ケル嵌頓後經過時間(日數)ニ伴フ解剖的變化及ビ死亡率

第一一表ニ示スガ如ク、余ノ調査シタル嵌頓ヘルニア八六例中腸管ヘルニア八二例(大網膜ヲ混ズルアリ或ハ混ゼザルアリ)、大網膜ヘルニア四例ヲ有シ、尙臍帶ヘルニア一例ニアリテハ内容トシテ肝臓及ビ腸管ヲ藏ス。腸管ヘルニア八二例中腸壁ヘルニア六例アリ。腸管ヘルニア八二例中其血行障害ノ狀ヲ見ルニ、主トシテ靜脈ノ絞扼セラレタル場合殆ンド其全數ヲ占メ、動脈モ亦全然絞扼斷絶セラレタル場合先ヅ無キガ如シ。而シテ靜脈血行障害ノ結果トシテ現ハレタ

ル病的變化ノ概要ヲ見ルニ、第一時期靜脈性多血狀態（鬱血）ニ於ケルモノ多數ヲ占メ、第二時期化膿性蜂窠織炎ノ狀態ニアルモノ比較的少數ナルガ如キモ、第三時期壞疽ノ狀態ニ在ルモノ一四例一七・〇七%（他ニ腸間膜ノ一部ノミ壞疽ニ陷レルモノ一例アリ）ヲ算シ、大網膜ヘルニア四例中一例二五%壞疽ニ陷リ、腸管大網膜混合ヘルニア三例ニ於テ大網膜ニ壞疽ヲ來セルヲ以テ、八六例中壞疽ノ狀態ヲ呈セシモノ一九例二二・〇九%ヲ計上ス。

第 十 一 表

經過日數	例數	死亡	摘	要
一時間	一			
六時間	三		村○唯○、〇、三歳右陰囊、腫瘍大雞卵大、内容タル直腸及迴腸下部鬱血ノ狀ヲ呈シヘルニア水多少血性ヲ帶ブ、	
七時間	二		關○、〇、二歳、脈搏一〇八ニ至ル右鼠蹊腫瘍雞卵大、	
八時間	一		勝○貞○、〇、九歳、右鼠蹊、腫瘍小兒手拳大、内容タル小腸大網膜ニ多少鬱血アリヘルニア水漿液血性、	
十二時間	四		田○信○、〇、四歳、左鼠蹊、腫瘍雞卵大、内容タル小腸ニ著變ナキモ大網膜ノ一部壞疽ニ陷ル、	
十三時間	一		林○男、〇、二歳、輕熱脈搏頻數、右鼠蹊腫瘍雞卵大、	
十四時間	一		櫻○正、〇、一歳、右陰囊、腫瘍雞卵大、尿閉アリ、	
十五時間	一		重○卯○吉、〇、二三歳、右陰囊、腫瘍小兒頭大、内容タル小腸多少鬱血シヘルニア水濁濁ス、	
十六時間	四		石○元○郎、〇、三六歳、右陰囊、腫瘍手拳大、内容大網膜四〇×一〇糝殆ンド血栓形成ヲ見血行ナシ、	
十七時間	一		永○忠○、〇、三歳、右鼠蹊、腫瘍雞卵大、内容タル小腸ニ多少鬱血アリ血性ヘルニア水、	
			菅○和、〇、三歳、右陰囊、腫瘍手拳大、皮靜脈強ク擴張ス、	

十八時間	一	木○隆、♂、一三歳、一般状態不良、脈搏細小ニシテ頻數、左鼠蹊、腫瘤手拳大ニシテ發赤アリ、内容タル小腸約一四種暗紅色ヲ呈シ腸間膜ニ血栓形成アリ血性瀾濁セルヘルニア水多量、
十九時間	一	
二十時間	二	中○慶○郎、♂、六四歳、左陰囊、腫瘤雞卵大、内容タル小腸紫藍色ヲ呈シ、ヘルニア水漿液血性ヲ呈シ腸間膜ニ輕度ノ血栓形成アリ、
二十一時間	二	鈴○郁○、♂、二歳、左陰囊、腫瘤雞卵大、内容小腸漿液血性無臭ナルヘルニア水多量
二十二時間	二	向○正○、♂、三歳、右陰囊、腫瘤大手拳大、發赤アリ、内容タル盲腸殆んど尋常、
一 日	九	網○喜○、♂、二歳、体温三八・二度、脈搏一二〇至、右鼠蹊腫瘤雞卵大、發赤シ且ツ紫藍色ヲ帶アリ、 石○道○助、♂、三八歳、惡感アリ、体温三九・三度、脈搏一二二至、左鼠蹊腫瘤雞卵大、内容タル大網膜及迴腸壞疽ニ陥ル、 鷺○好、♂、十一ヶ月、左陰囊、腸瘤雞卵大、内容タル小腸多少鬱血シヘルニア水帶黃色透明、 岡○さ○、♀、四四歳、左肢、腫瘤雞卵大、内容タル小腸(腸壁ヘルニア)其尖端略々拇指頭大壞疽トナリ、腸間膜血管血栓形成アリヘルニア水帶黃色血性、
二十六時間	一	飯○光○、♂、二歳、左陰囊、腫瘤大雞卵大、發赤アリ、
二十九時間	二	飯○稔、♂、四ヶ月、右鼠蹊、腫瘤雞卵大、内容タル小腸僅カニ鬱血シヘルニア水多少瀾濁ス、 平○敏○、♂、八歳、左陰囊、腫瘤小兒頭大、内容小腸暗赤色トナリ夫レニ一致セル腸間膜血管血栓形成アリヘルニア水帶黃色血性ニシテ無臭、
一 日 半	二	猪○福○、♂、四九歳、体温三八・七度、右陰囊、腫瘤小兒頭大發赤アリ、内容タル小腸鬱血シ血性ヘルニア水多量、 林○男、♂、二歳、右鼠蹊、腫瘤雞卵大、内容小腸ヘルニア水帶黃色透明、
三十九時間	二	吉○三○助、♂、四七歳、右陰囊、腫瘤小兒頭大、炎症性發赤アリ、内容小腸壞疽ニ陥リ大網膜血管血栓形成アリ尚腸間膜大網膜全ク壞死シヘルニア水混血瀾濁シ高度ニ腐敗シ惡臭ヲ發ス、 園○せ○、♀、生後三日臍帶ヘルニア腫瘤手拳大浸出液ノ出ヅルヲ見ル手術後死亡、 深○清、♂、二三歳、右鼠蹊、腫瘤、鷺卵大ニシテ發赤アリ、 黒○龜○、♂、九ヶ月、左陰囊腫瘤鷺卵大ニシテ發赤アリ、

二 日	二 日 半	三 日	四 日	五 日	六 日
一五	一	七	四	六	二
三	一	一			二
加○唯○、○、三七歳、内(盲腸後)ヘルニア、体温三七・五度、脈搏細小二二〇至、手術後死亡、	森○保○、○、二八歳、右會陰ヘルニア、腫瘍外表ヨリ觸知シ難キモ、打疹上下腹濁音ヲ呈シ内容タル廻腸下部小骨盤右側ニ侵入シ壊疽ニ陥リ該部附近ニ腐敗性血性滲出液多量、術後死亡、	竹○得○郎、○、四歳、左陰囊、腫瘍鶏卵小兒頭大ノ中バ位ニシテ發赤アリ、林○く、○、三八歳、右鼠蹊腫瘍大鳩卵大、内容大網膜、ヘルニア水濁濁シ腹部益々緊満シ術後八日ニシテ死亡、	河○フ○、○、四四歳、左鼠蹊、腫瘍雞卵大、内容小腸(腸壁ヘルニア)壊疽ヲ見ズ、水○一○、○、三三歳、右陰囊、腫瘍鶏卵大發赤アリ、内容タル大網膜壊疽ニ陥リ癒着セリ、ヘルニア水著變ナシ、	清○隆○、○、二一歳、右陰囊、腫瘍小兒頭大、内容タル小腸壊疽ニ陥リ穿孔セリ、佐○恒○郎、○、一一ヶ月、体温三八・五度、脈搏細小一二至、右陰囊腫瘍雞卵大ニシテ發赤高度内容タル盲腸蟲樣突起及廻腸下部ニ鬱血アリ、腸間膜血栓形成中等度ニ存シヘルニア水帶黃色透明、	安○竹○郎、○、一七歳、左陰囊、腫瘍鶏卵大、内容タル小腸壊疽ニ陥リヘルニア水濁濁ス、術後三日ニシテ死亡、
柴○忠○、○、二歳、右陰囊、腫瘍雞卵大發赤アリ、		ワ○德○郎、○、四五歳、右股、腫瘍雞卵大、内容タル小腸ノ一部壊疽トナル、		半○ミ○、○、五八歳、右股腫瘍手拳大、内容タル小腸及ヘルニア囊壊疽ニ陥リ穿孔シ糞便ヲ洩ラシ糞便性蜂窠織炎ノ狀ヲ呈シ惡臭ヲ發ス、術後三日日ニ死亡、	
神○孝○、○、二〇歳、体温三八・三度、脈搏細小頻數且不整呼吸三二回、右陰囊腫瘍鳩卵大、内容小腸(腸壁ヘルニア)紫藍色ヲ呈シ膨滿シ大網膜壊疽ニ陥リヘルニア水濁濁ス、少量、腹腔ニ稀薄黄色液ヲ見ル、手術後死亡、		久○木○に、○、五〇歳、右股、腫瘍雞卵大、内容タル廻腸(腸壁ヘルニア)一般ニ鬱血シ特ニ絞扼輪一部ニ於テ著シク帶青暗赤色ヲ呈シ大網膜鬱血シ一部分壊疽トナル、		黒○順○、○、三歳、右陰囊、腫瘍大鳩卵大發赤アリ、	
藤○靜、○、一歳、古鼠蹊、腫瘍手拳大、内容タル廻腸鬱血シ腸間膜ニ壊疽ニ陥レル部アリヘルニア水血性ヲ帶ア、		飯○節○、○、一歳、左陰囊、腫瘍雞卵大、内容盲腸蟲樣突起及廻腸ノ下端ナルモ腸管ニ著變ヲ見ズ、ヘルニア水透明ナルモ多少血性ヲ帶ア、		栗○隆、○、二歳、右陰囊腫瘍鶏卵大ニシテ發赤アリ、内容タル小腸腸壁高度ニ侵サ	
川○伊○郎、○、十五歳、右陰囊、腫瘍鶏卵大ニシテ發赤、炎症性浮腫アリ、内容タル小腸(腸壁ヘルニア)及大網膜壊疽ニ陥リヘルニア水混血帶黑色ヲ呈ス、					

七 日	四	二	レヘルニア水濁濁ス、術後翌日死亡。 鳥○喜○治、〇、一歳、右陰囊腫瘍雞卵大、内容タル小腸壞疽ニ陥リヘルニア水濁濁ス術後翌日死亡。
八 日	三	一	内○ツ○、〇、六五歳体温三八・七度、脈搏一〇八至、左鼠蹊、腫瘍雞卵大、發赤シ且壞疽ニ陥リ内容タル小腸勿論壞疽ヲ來シ穿孔シ輕微ナル糞便性蜂窠穢炎アリ術後死亡。 幸○佐○、〇、五二歳、右股、腫瘍雞卵大、内容タル廻腸壞疽ニ陥リ一錢銅貨大ノ穿孔アリ。 鳥○新○郎、〇、六一歳、左股、腫瘍雞卵大ニシテ多少發赤シ、内容タル小腸(腸壁ヘルニア)壞疽ニ陥リ大網膜血管血栓形成アリ漿液血性ヘルニア水多量。
十 日	二	一	松○喜○、〇、二三歳、左鼠蹊、腫瘍手拳一倍半大、内容大網膜、ヘルニア水多少濁濁ス。 松○ヨ○、〇、五八歳、右股、腫瘍雞卵大、内容タル小腸壞疽ニ陥リ、糞便性蜂窠穢炎トナル、術後一七日ニシテ死亡。

備考 一、他ニ簇頓ヘルニアニシテ發病時ヨリ手術時迄ノ經過日數判明セザルモノ七例アリ、其中石○久○郎、右簇頓腹膜前鼠蹊ヘルニアニテ手術後四日ニシテ死亡。

二、摘要欄ニハ著明ナル例ヲ掲グ、而シテ各例ニ於テ概テ股簇頓ヘルニアナル六字ヲ省略セリ例之左股トハ左簇頓股ヘルニアノ略ナリ。

Schloffer ハ簇頓初期(第五日目迄)ニ於テヘルニア水ハ無菌ナリト云ヒ、Graser ハ簇頓後二四時間ニシテヘルニア水ハ殆ンド常ニ細菌ヲ見ルト云ヒ、Nepveu, Bönneken ハ腸管變化ナキニ拘ラズ既ニヘルニア水中ニ細菌ヲ見ルコトアリト云ヒシガ、余ノ調査症例中簇頓後既ニ一四時間ニシテ右陰囊ヘルニアニ於テ、腫瘍小兒頭大、内容タル小腸多少鬱血シヘルニア水濁濁セル一例アリ。又簇頓後一八時間ニシテ左鼠蹊ヘルニアニ於テ腫瘍手拳大、發赤アリ、内容タル小腸鬱血シ腸間膜ニ輕度ノ血栓形成アリ。血性濁濁セルヘルニア水多量ニ存シタル一例アリ。尙簇頓後三九時間ニシテ右陰囊ヘルニアニ於テ腫瘍小兒頭大、炎症性發赤アリ、内容タル小腸、腸間膜及ビ大網膜壞疽ニ陥リヘルニア水血性濁濁シ、高度ニ腐敗シ惡臭ヲ發セル一例アリ。前記三例ハ何レモヘルニア水中細菌ヲ有スルコト明カニシテ、特ニ最後ノ症例ニ在リテハ高度ノ腐敗性炎症ヲ起セリ。

腸壁ヘルニア六例中、矢頓後四日ヲ經過セル一例、四四歳ノ婦人左鼠蹊ヘルニアニシテ腫瘤雞卵大ナルガ、内容タル小腸猶壞疽ニ陥ラズ、稀有ナル症例ト謂フベシ、大網膜ヘルニア四例中一例矢頓後三日ヲ經過セル三八歳ノ婦人、右鼠蹊ヘルニアニシテ腫瘤大鳩卵大、内容タル大網膜鬱血狀態ニ在リテヘルニア水瀾濁シ、術後尙益々腹部緊満シ中等度ノ熱發アリ。急性汎發性腹膜炎ノ下ニ術後八日ニシテ死亡ス。特記スベキ症例ナリ。矢頓後六日ニシテ五八歳ノ婦人、右股ヘルニアナルガ腫瘤手拳大、内容タル小腸及ビヘルニア囊壞疽ニ陥リ穿孔シ糞便ヲ漏ラシ糞便性蜂窠織炎ノ症ヲ呈シ、術後三日目ニ死亡セルアリ。又矢頓後八日ニシテ六五歳ノ婦人右内鼠蹊ヘルニアナルガ、腫瘤雞卵大、發赤シ且ツ壞疽ニ陥リ、内容タル小腸ハ勿論壞疽ヲ來シ、穿孔シ爲メニ輕度ナル糞便性蜂窠織炎ヲ起シ、術後暫時ニシテ死亡セルアリ。

矢頓後内容臓器ノ壞疽發起ヲ時間的ニ觀察スルニ、一二時間未滿ノ症例ニ於テハ壞疽ヲ起セルモノナク、一二時間ヲ經過セル症例四例中、大網膜ノ一部壞疽ニ陥レルモノ一例二五%。一日ヲ經過セル症例九例中大網膜及廻腸ノ壞疽ニ陥レルモノ一例、小腸ノ一部(腸壁ヘルニア)壞疽ニ陥レルモノ一例計二例二二・二二%。三九時間ヲ經過セル症例二例中小腸、腸間膜及大網膜ノ壞疽ニ陥レルモノ一例五〇%。二日ヲ經過セル症例一五例中小腸(腸壁ヘルニア)紫藍色ヲ呈シ膨満シ大網膜壞疽ニ陥レルモノ一例、腸間膜ノ一部壞疽ニ陥レルモノ一例、小腸(腸壁ヘルニア)及ビ大網膜壞疽ニ陥リヘルニア水血性帶黑色ヲ呈セルモノ一例、計三例二〇%。二日半ヲ經過セル症例一例(右會陰ヘルニア)中廻腸下部壞疽ニ陥リ該部附近ニ腐敗性血性滲出液多量ニ存スルモノ一例一〇〇%。三日ヲ經過セル症例七例中小腸ノ一部壞疽ニ陥レルモノ一例、廻腸(腸壁ヘルニア)一般ニ鬱血シ特ニ絞扼輪ノ一部著シク帶青暗赤色ヲ呈シ、大網膜鬱血シ一部分壞疽トナレルモノ一例、計二例二八・五七%。四日ヲ經過セル症例四例中大網膜(大網膜ヘルニア)壞疽ニ陥レルモノ一例二五%。五日ヲ經過セル症例六例中小腸壞疽ニ陥リ穿孔セルモノ一例一六・六七%。六日ヲ經過セル症例二例中小腸壞疽ニ陥レルモノ一例、小腸及ビヘルニア囊壞疽ニ陥リ穿孔セルモノ一例、計二例一〇〇%。七日ヲ經過セル症例四例中小腸壞疽ニ陥レルモノ一例二五%。八日ヲ經過セル症例三例中小腸壞疽ニ陥リ穿孔シ其周圍組織タルヘルニア囊及皮膚等壞疽ニ陥レルモノ一例、廻腸壞疽ニ陥リ穿孔セルモノ一例、小腸(腸壁ヘルニア)壞疽ニ陥レルモノ一例、計三例一〇〇%。一〇日ヲ經過セル症例二例中小腸壞疽ニ陥リ穿孔シ糞便性蜂窠織炎トナレルモノ

一例五〇%アリ。要スルニ、矢頓ニ際シ内容ノ臟器變化如何ハ主トシテヘルニア門ノ絞扼ノ強弱ニ關スルモノナレバ、其病的變化程度ハ矢頓後經過時間(日數)ニ平行セズ。

又死亡ヲ矢頓後ノ經過時間(日數)ニヨリ觀察スルニ、二日未滿ノ症例ニ於テハ死亡ナク、二日ヲ經過セル症例一五例中死亡三例二〇%、二日半ヲ經過セル症例一例中死亡一例一〇〇%、三日ヲ經過セル症例七例中死亡一例一四・二九%、四日ヲ經過セル症例四例中死亡ナク、五日ヲ經過セル症例六例中死亡ナク、六日ヲ經過セル症例二例中死亡二例一〇〇%、七日ヲ經過セル症例四例中死亡二例五〇%、八日ヲ經過セル症例三例中死亡一例三三・三三%、一〇日ヲ經過セル症例二例中死亡一例五〇%、其他右矢頓腹膜前鼠蹊ヘルニア一例矢頓後ノ經過時間(日數)不明ナルガ手術後四日ニシテ死亡セリ。前記ノ如ク死亡亦屢々矢頓後ノ經過時間(日數)ニ比例セザルコトアリ。

Volmsニ據ンバ、矢頓後五日若シクハ夫レ以上ヲ經過セル七例ニ於テ、何レモ内容タル腸管ニ壞疽ノ徵候ヲ見ズ、此種ノ矢頓ハ弛緩性矢頓ト稱スベク、而シテ殆ンド除外的ニ高年ノ患者ニ觀察セラル。恐ラク動脈性血壓減少ニヨリテ腸壁ニ於ケル出血性梗塞形成ガ防ゲラル、ニ因ルナラン。尙此等症例ハ矢頓ノ強度ハ屢ヘルニア門ト矢頓シタル腸管ノ大サトノ間ニ於ケル不當ノ關係ニ倚ルモノニアラザルヲ證スト。N. W. Kopylowハ矢頓後一二日ヲ經過セル一例ニ於テ手術ニヨリ治愈セシメ、又矢頓後一ヶ月ニシテ手術シ死亡シタル大網膜ヘルニアノ一例ヲ報ゼリ。

第六項 腸管ヲ内容トセル矢頓ヘルニアニ於ケル病的變化程度及ビ其死亡率

第一二表ニ示スガ如ク、余ノ調査セル八九例ヲ Alipow, G. 報告、露西亞ペンザ赤十字病院ニ於テ自一九〇五年至一九一四年十ヶ年間に手術セラレタル一三三例ノ調査ニ比較セリ。前者ハ後者ニ比シ其病的變化程度概シテ輕ク從ツテ死亡率少シ。元來矢頓ヘルニアノ豫後ハ醫學特ニ外科學ノ進步、一般民衆衛生思想普及ノ程度、經濟狀態及ビ交通ノ便否等ニ大ナル關係ヲ有スルモノナリ。又腸壞疽ヲ起シタル矢頓ヘルニアニ於ケル死亡率ヲ他文獻ニ徵スルニ、E. Graserニ據ンバ矢頓ヘルニア一六五例中腸壞疽ヲ起シタルモノ三六例二一・八二%、同上死亡一二例三三・三三%ヲ算シ、N. W. Kopylowニ據ンバ矢頓ヘルニア七五例中腸壞疽ヲ起シタルモノ二五例三三・三三%ニシテ、死亡率ハ腸壞疽ヲ起シタルモノノ二〇乃至八〇%ナリト云ヒ、其他單ニ腸壞疽ヲ起セル比率ニ就キ、前防氏ハ矢頓ヘルニア三八例中四例一〇・五三%、E. M. Cornerハ同三九五例中三〇例七・五七%ナリキト報ゼリ。

第七項 腸切除ヲ施シタル箠頓ヘルニアニ係ル死亡率

腸壁高度ニ侵サレ特ニ腺壞疽ヲ起シ腸切除術ヲ要スルガ如キモノニ在リテハ其豫後懸念スベキモノ多シ。是レ病變ノ斯ク進行セル患者ハ全身症狀不良ナルノミナラズ、既ニ恐ラク細菌ニ感染セシヘルニア水ノ汜濫ニヨリ腹膜炎ヲ起ス

第十二表

I ノモキナ化變キベス記特ニ係締腸ルタシ頓箠及囊アニルヘ			
率 比 同	亡 死	數 例	者 告 報
3.64%	二	五五	山 菊
9%	八	八七	Alipow, G.
II ノモキナ成形栓血ニ管血膜間腸レサ侵ク強壁腸			
率 比 同	亡 死	數 例	者 告 報
9.09%	一	一一	山 菊
15%	三	二〇	Alipow, G.
III ノモルナ明著成形栓血ニ管血膜間腸			
率 比 同	亡 死	數 例	者 告 報
11.11%	一	九	山 菊
35%	六	一七	Alipow, G.
IV ノモルセ弱衰テシニアニルヘ性疽壞			
率 比 同	亡 死	數 例	者 告 報
50%	七	一四	山 菊
66%	六	九	Alipow, G.

告ニ較ブルモ何等進歩ノ跡ヲ見ズ。

第八項 箠頓ヘルニアニ於テ遭遇セル死亡ノ死因

死因トシテハショック、虚脱、汎發性腹膜炎、麻痺性吐糞症、肺梗塞、敗血症、膿毒症、飢餓、肺炎、丹毒等ナルガ第一

原著 菊山 下腹ヘルニア七三九例ニ係ル統計的觀察

虞多シ。第一二表記載ノ如ク、余ノ調査シタル箠頓ヘルニア九三例中腸切除術ヲ施シタルモノ一一例ニシテ、死亡三例二七・二七%ナルガ、他文献ニ比スルニ、Martina (一九〇三年) ハ其死亡率一九・四四%ニシテ、近年ニ於ケル Lukesona (一九二一年) ノ四〇・七八%、Alipow, G. (一九二三年) ノ三三・三三%等ノ報

報 告 者	箆 頓 へ ル ニ ア 總 數	腸 切 除	死 亡	死 亡 率	同
山 菊	九三	一一	三	27.27	備考
Alipow, G,	一三三	一六	六	33.33	一、E. Graserノ報告ハ鼠蹊ヘルニア及股ヘルニアノ計トス
Lukesona	七三二	七六	三一	40.78	
E. Graser	一六五	三六	一二	33.33	
Brun'sche Klinik	1896—1906			40.00	
Martina		三六	七	19.44	
均 平 = 並 計		175	59	33.71	

頓ヘルニア七三三例中腸壁障礙ヲ有スル七六例ニ於テ腸切除ヲ行ハレシガ、手術後死亡三一例ヲ出シ其死因虚脱一八例五八・〇六%、麻痺性吐糞症六例一九・三五%、汎發性腹膜炎二例六・四五%、肺炎二例六・四五%、惡液質二例六・四五%及ビ丹毒一三例三・三二%ニシテ、虚脱ニテ致死シタルモノ亦最多ク共ニ半數以上ヲ占ム。

第五章 療 法

第一節 姑息的療法

四表ノ如ク、余ノ調査セル箆頓ヘルニア九三例中手術後死亡一二例一二・九〇%（一歳乃至一〇歳五三例中三例五・六六%、一一歳乃至二〇歳五例中二例四〇%、二一歳乃至三〇歳九例中二例二二・二二%、三一歳乃至四〇歳六例中二例三三・三三%、四一歳乃至五〇歳一〇例中死亡ナク、五一歳乃至六〇歳三例中二例六六・六七%、六一歳乃至七〇歳六例中一例一六・六七%、七一歳乃至八〇歳症例ナク、八一歳乃至九〇歳一例中死亡ナシ）ニ於テハ其死因虚脱六例五〇%、汎發性腹膜炎二例一六・六七%、麻痺性吐糞症二例一六・六七%、糞便性蜂窠織炎一例八・三三%及ビ飢餓一例八・三三%ナリ。

又 Lukesona（一九二一年）ニ據レバ、箆

第一五表記載ノ如ク姑息的療法ニ附シタルヘルニア二九〇例アリ。小兒特ニ二歳未満ノモノ及ビ屢觀血のニ手術ヲ

年次	氏名	性別	年齢	病名	手術式
大正九年	岡○せ○	♀	生後三日	嵌頓	二日 開腹術(整復)
同	内○ッ○	♀	六十五歳	左嵌頓 鼠蹊ヘルニア	八日 切開並ニ開腹術
大正十年	安○竹○郎	♂	十七歳	左嵌頓 陰囊ヘルニア	六日 Bassini氏法
同	加○唯○	♂	三十七歳	嵌頓盲腸後 ヘルニア	二日 開腹術
同	石○久○郎	♂	二十六歳	右嵌頓腹膜前 鼠蹊ヘルニア	一日
同十二年	林○〇○	♀	三十八歳	右嵌頓 鼠蹊ヘルニア	三日
同十三年	栗○隆	♂	二歳	右嵌頓 陰囊ヘルニア	七日
同	神○孝○	♂	二十歳	右嵌頓 鼠蹊ヘルニア	二日
同	松○ヨ○	♀	五十八歳	右嵌頓 腹ヘルニア	十日 切開
同十四年	半○ミ○	♀	五十八歳	右嵌頓 腹ヘルニア	六日 切開
同	鳥○喜○治	♂	一歳	右嵌頓 鼠蹊ヘルニア	七日
同十五年	森○保○	♂	二十八歳	右嵌頓 會陰ヘルニア	二日半 開腹術

備考、1、Bassini氏法ヲ行フニ際シテハ勿論觀血的ニ整復ヲ施シ後本法ニ移レルナリ

第十五表

年次	治癒	未治	死亡	不明	備考
大正九年	三四	(アニルへ腹側) 二	2, 七	一二	備考、一、括弧内亞刺比亞數字ハヘルニア條頓ニ因リ致死セルモノヲ示フ。 二、不明欄ニハ回答ナク全然不明ナルモノ及ビ治癒ヲ計上ス。 三、本表ハ主トシテ鼠蹊ヘルニアニシテ括弧内ハ他種ヘルニアノ該數ニ於ケル內數ヲ示ス。 四、本表ニ於ケル治癒トハ勿論一時的治癒ヲ示ス。
同十年	(ルへ臍) 二七 (一アニ)	(ビ及アニルへ臍) 一七 (一各アニルへ腹上)	(1) 五	一七	
同十一年	一四	五	四	(ルへ股) 一四 (一アニ)	
同十二年	(ルへ股) 一五 (一アニ)	(一アニルへ臍) 八		三	
同十三年	一三	五		一四	
同十四年	一〇	一三	二	(ルへ股) 一〇 (一アニ)	
同十五年	一〇	一九	二	九	
計	123	78	20	69	
同百分率	42.41	26.90	6.90	23.79	

原著 菊山 下腹ヘルニア七三九例ニ係ル統計的觀察

嫌フ高年者ニ於ケル還納性鼠蹊ヘルニアニシテヘルニア門ノ小ナルモノニヘルニア帶ヲ用ヒラレ、稀ニ還納性股ヘルニアニ亦ヘルニア帶ヲ施サレ、臍ヘルニアニ主トシテ絆創膏細帶ヲ用ヒラレ、或ハ民間ニ於テ甚ダ稀有ナルモ迷信的ニ灸治法行ハレ爲ニ潰瘍ヲ形成シ、甚ダシキハ内臓ノ一部ヲ露出セルモノ一例アリタリ。ヘルニア帶使用ハ通例數ヶ月乃至一、二年ニシテ、往々四、五年ニ及ビ、一七年ノ長キニ亘リ用ヒラレタルモノ一例アリキ。ヘルニア帶裝用ニヨリ著シキ骨盤上部發育障礙ヲ來シタルモノ一例ヲ見タリ。又何等處置ヲ施サズ放置シ治癒シタル外鼠蹊ヘルニアノ數例及ビ股ヘルニアノ一例ヲ見タリ。

第二節 根治手術及ビ其終末結果

第一六表ニ於ケルガ如ク、ヘルニア四〇三例ニ就キ根治手術行ハル。術後死亡一四例三・四七%ヲ算シ、經過不明一二例アリ。再發二八例七・四三%ニシテ鼠蹊ヘルニア二五例股ヘルニア二例及ビ側腹ヘルニア一例是レナリ。治癒三四九例八九・二六%ヲ計上ス。其再發時期ハ一ヶ月以内五例、二ヶ月三例、三ヶ月二

第十六表

男女別 種類	年次	男				女			
		鼠蹊ヘルニア	股ヘルニア	側腹ヘルニア	會陰ヘルニア	内ヘルニア	鼠蹊ヘルニア	股ヘルニア	側腹ヘルニア
	年九正六	四六					一〇	一	一
	年十同	四五	一				四		
	年一十同	二九					二		
	年二十同	四〇	一				五		
	年三十同	四八	一				六		
	年四十同	六九	二				七		
	年五十同	六二	一	一	一		八	一	一
	計	三三九	三	三	一	一	四二	二	二

備考 一、本表中矢頭ヘルニア九三例ヲ含ム、

發一二例一四・八一%ヲ計上シ、其比一對二・七四ニシテ、矢頭ヘルニア手術ハ非矢頭ヘルニアノ失レニ比シ三倍弱ノ再發率ヲ示ス。是レ矢頭ヘルニアニ在リテハ、矢頭ニ由リヘルニア門周圍組織荒蕪セラレ、且ツ手術ニ際シ生命ノ顧慮上非矢頭ヘルニアノ夫レノ如ク往々用意周到ニ實施シ得ザルニ因ルモノト想像セラル。

Coley, B. L. (一九一四年)ニ據レバ主トシテ非矢頭性ヘルニア手術八三七例中再發五七例六・八%ヲ算シ、矢頭ヘルニア手術後ノ死亡ニ就キ Allpaw, G. (一九一三)例中一三三例一七・二九%、小島氏ハ四〇例中四例一〇%アリキト報ゼリ。手術セラレタルヘルニア四〇三例中、男子三四七例女子五六例ニシテ、其比六・二對一即チ男子ハ女子ノ六倍強ニ一致シ、同鼠蹊ヘルニア三八一例中男子三四〇例女子四一例ニシテ、其比八・二九對一即チ男子ハ女子ノ八倍強ニ相當シ、同

一四四一 (九四)

例、四ヶ月一例、五ヶ月一例、六ヶ月五例、一年二例、一年七ヶ月一例、一年一〇ヶ月二例、二年一例、二年半二例及ビ三年三例トス。

同ヘルニア四〇三例ヲ非矢頭、矢頭ノ二種ニ分チ再發ノ多寡ヲ比較スルニ、非矢頭ヘルニア三一〇例(鼠蹊ヘルニア二九八例、股ヘルニア八例及ビ側腹ヘルニア四例)中死亡二例、經過不明一二例ヲ除キ、殘二九六例中再發一六例五・四一%ヲ算シ、矢頭ヘルニア九三例(矢頭鼠蹊ヘルニア八三例、同股ヘルニア七例、同臍帶ヘルニア、同會陰ヘルニア及ビ同内ヘルニア各一例)中死亡一二例一二・九〇%ヲ除キ、殘八一例中再

股ヘルニア一五例中男子三例女子一二例ニシテ、其比一對四即チ女子ハ男子ノ四倍ナルガ、中山氏ノ報告ニ據レバ、明治三十年以來大正十一年八月ニ至ル二十五年間東京順天堂醫院ニ於ケルヘルニア手術一二四八例中男子ハ女子ノ一〇倍強、鼠蹊ヘルニアハ男子ハ女子ノ一一倍強、股ヘルニアハ女子ハ男子ノ一一倍強ナルガ、余ノ調査ガ中山氏ノ報告ニ比シ女子ノ手術率甚ダ多キハ年ヲ遂ウテ女子ニ於ケル衛生思想ノ向上ヲ來シツ、アル結果ニシテ一面醫學ノ進歩ヲ意味シ欣快ニ堪ヘズ。

第二編 各 論

第六章 鼠蹊ヘルニア

第一節 鼠蹊ヘルニアノ種類

第一項 ヘルニア門ノ位置ニヨル分類

鼠蹊ヘルニア六九四例中外鼠蹊ヘルニア以外、診斷若シクハ手術ニ據リ解剖學的ニ檢出セラレタル内鼠蹊ヘルニア七例一・〇一%アリ。村主氏ハ同二三六例中三例一・二七%、Downes William A. (米) ハ一〇%、Niedlich (獨) ハ同九一一例中一八例一・九八%、Erdman, Seward (米) ハ同九七八例中三三三例三三%ノ内鼠蹊ヘルニアアリシヲ報ジ、特ニ後二者ノ報告例ハ共ニ總テ手術ニヨリ解剖學的ニ確證シタルモノナリ。之ニ依ツテ見レバ内鼠蹊ヘルニアハ米國ニ著シク多ク、本邦及ビ獨國ニ遙カニ少キガ如シ。元來内鼠蹊ヘルニアハ知ラル、如ク後天性ニ起レルモノニシテ、生活狀態特ニ職業ノ差異ニヨリ著シク其發病率ニ多寡ヲ生ズルヤ必セリ。

次ニヘルニア門ノ大サハ第一七表ニ示ヌガ如シ。

第二項 左右及ビ兩側別

鼠蹊ヘルニアハ男子ニ於テハ特ニ右側ノ左側ニ比シ頗ル多キハ既ニ周知ノ事實ナリ。余ノ調査セル六四三人中男子鼠蹊ヘルニア五七二人女子鼠蹊ヘルニア七一人ナルガ、又男子鼠蹊ヘルニア五七二人中左側一六五人二八・八六%、右側三六〇人六二・九四%、兩側四七人八・二二%ヲ算シ、其左右側發生ノ比一對一・九二ナリ。然ルニ當調査ニ在リテハ女子鼠蹊ヘルニアハ左側ニ多ク即チ其七一人中左側三八人、右側二九人、兩側四人ニシテ其左右側發生ノ比一・二七對一

氏 主 村		山 菊		者 告 報
率分百同	數 例	率分百同	數 例	數 例 サ 大
1.06	一	17.98	一六	大 頭 指 小
55.32	五二	38.20	三四	大 頭 指 示
		2.25	二	大 頭 指 中
9.95	九	21.35	一九	大 頭 指 拇
22.34	二二	13.48	一二	大 倍 二 頭 指
10.64	一〇	3.37	三	大 倍 三 頭 指
1.06	一			大 倍 四 頭 指
		1.13	一	大 糧 四 徑 直
		2.25	二	大 卵 雞
	九四		八九	計

七一・七七%ニ比スルニ至ツテハ實ニ宵壤ノ差アリト云フモ過言ニアラズ。

第三項 脱出ノ高サニヨル分類

男子鼠蹊ヘルニア五七二人(外鼠蹊ヘルニア以外内鼠蹊ヘルニアニ決定セラレタルモノ六人、即チ外來四人入院二人)中初期ヘルニア右側一例〇・一七%、不完全鼠蹊ヘルニア症例無、完全鼠蹊ヘルニア左側八六例一四・九六%、右側二三〇例四〇%、兩側二三人四、陰囊ヘルニア左側八三例一四・四三%、右側一三三例二三・一三%、兩側二〇人三・四八%、内臓脱出症例無ヲ算シ、本數中兩側ニシテ左鼠蹊、右陰囊ヘルニアナルモノ三人及ビ右鼠蹊、左陰囊ヘルニアナルモノ一人アリ。各鼠蹊及ビ陰囊ノ項ニ編入シタルニヨリ誤解ヲ避クル爲メ人及ビ例ナル語ヲ種々雜多ニ用ヒタリ。女子鼠蹊ヘルニア七一人(内鼠蹊ヘルニアニ決定セラレタルモノ入院一人)中初期ヘルニア左側一人、不完全鼠蹊ヘルニア症例無、

ナリ。Graserハ女子鼠蹊ヘルニアハ右側ニ多シトナシ、Lester亦右側ニ多キモ其理不明ナリト報ジ、Wullsteinハ男子外鼠蹊ヘルニアハ右側ニ多シトナセルモ女子鼠蹊ヘルニアニ於ケル左右側ノ多寡ニ論及セズ。元來女子ニ於テ胎生後半期ニ際シ卵巢下降ニ基ヅク腹膜突起(Diverticulum Nucki)形成ハ男子ニ於ケル睪丸下降ニ因ル腹膜鞘狀突起形成ト其趣ヲ異ニス。輕卒ニ斷ズベカラズ。

第一八表ニ示スガ如ク兩側鼠蹊ヘルニアハ本邦人ニ少ナク、歐米人ニ甚ダ多シ。殊ニ Bergerノ報セル

報告者	總數	左右 兩側別	例數	同百分率
菊山	642	左右 側	202 390 51	31.42 60.65 7.93
前防氏	72	左右 側	12 55 5	16.67 76.39 6.94
村主氏		左右 側		8.00
G. Filippini	1671	左右 側	549 878 244	32.85 52.54 14.60
Berger (獨)	6220	兩 側	1042 4526	16.75 72.77
Coley, B. L. (米)	2173	兩 側	620	28.53

完全鼠蹊ヘルニア左側二五人三五・二一%、右側
二人三〇・九九%、兩側三人四・二三%、陰唇
ヘルニア左側一三人一八・三一%、右側七人九・
八六%、兩側一人一・四一%ヲ計上ス。

而シテ前記男子還納性鼠蹊ヘルニア八五例ニ
ツキ各腫瘤ノ大サヲ調査シタルニ雞卵大二九例
三四・一二%ヲ最多トシ、手拳大一三例一五・二
九%、鳩卵大一二例一四・一二%及ビ拇指頭大一
〇例一一・七七%等順次之ニ亞ギ、小兒手拳大
七例八・二六%、小雞卵大四例四・七一%ヲ算
セルガ、小兒頭大ノモノ一例一・一八%ヲ有ス
ルニ過ギズ。而カモ是レ陰囊水腫ヲ合併セルモ
ノナリ。

其他腫瘤ノ大サ小兒頭大ヲ有スル巨大ナル
ヘルニアヲ調査セシガ第一九表ニ示スガ如ク、

ヘルニア七三九例中一〇例一・三% (男子鼠蹊ヘルニア六一九例中一〇例一・六二%)ヲ算シ、同一〇例中還納性ヘルニア
一例、嵌頓ヘルニア九例ナリ。箕〇留〇郎ノ症例ニ於テハ腫瘤ノ増大實ニ其急劇ナル驚クベキモノアリ。同人ハ大工職
ニシテ三十四日前左鼠蹊部ニ還納性小腫瘤ヲ生ジ、夫ヲ忍耐シテ日々過劇ナル勞役ニ服シ特ニ家屋建築中上棟ニ際シ
テ然リ。其間次第ニ腫瘤増大シ、陰囊ニ入り五日前來便秘ノ傾向アリ、嵌頓症狀顯著トナリ腫瘤益々大ニ遂ニ小兒頭
大トナル。

第四項 發生ノ時期ニヨル分類

余ハ手術セラレタル鼠蹊ヘルニア八二例ニ就キ、解剖學的ニ先天性ヘルニア囊ヲ有スル先天性外鼠蹊ヘルニア一六例

一九・五一%ヲ檢出シタリ。同一六例中左側四例右側一二例ナリキ。他六六例八〇・四九%ニ後天性鼠蹊ヘルニアトス。

第十九表

年次	氏名	別性	年齢	病名	發病時期	大サ	内容	手術式	轉歸	摘要
大正九年	箕○留○郎	♂	六一	左嵌頓 陰囊ヘルニア	六一歳	小兒頭大	小腸	Ross氏法	治	
同十一年	林○兵○	♂	四	前同	生後 六ヶ月	前同	小腸血性 ヘルニア水多量	前同	再發	手術後約六ヶ月再發
同十三年	猪○福○	♂	四九	右嵌頓 陰囊ヘルニア	二〇歳	前同	小腸	前同	治	
同十四年	井○重	♂	一七	左嵌頓 陰囊ヘルニア	滿一歳	前同	小腸	前同	治	
同	幸○三○助	♂	四七	右嵌頓 陰囊ヘルニア	二三歳	前同	大腸網膜 小腸潤濁セル ヘルニア水多量	前同	治	内容タル小腸壞疽ヲ 起シアリ約十糎切除
同	重○卯○吉	♂	二三	前同	生後 間モナク	前同	小腸	前同	治	
同	橋○清	♂	二五	前同	三歳	前同	小腸	前同	治	
同十五年	平○敏○	♂	八	左嵌頓 陰囊ヘルニア	生後暫時	前同	小腸	前同	治	
同	小○清	♂	一四	右嵌頓 陰囊ヘルニア	五歳	前同	大腸網膜 小腸	前同	治	
同	古○文○	♂	一五	左 陰囊ヘルニア	先天性	前同	廻腸盲腸 蟲様突起	前同	治	

前防氏ハ七四例中二例二・七%、Frank ハ二六%、Wood ハ三三%、Goldner ハ五六%、Hansen ハ八五%ニ於テ先天性ヘルニア嚢ヲ有スル外鼠蹊ヘルニアヲ見タリト報ゼリ。本邦人ハ泰西人ニ比シ先天性外鼠蹊ヘルニア著シク少キガ如シ。余ノ統計ニ於テ鼠蹊ヘルニア發病年齡中本邦人第一歳以內ニ其發病率四五・六三%ナルニ、Crassノ報告ハ第一歳ニ於ケル發病率七分ナルハ、亦本邦人ハ獨乙人ニ比シ先天性外鼠蹊ヘルニア遙カニ少キヲ想像セシム。

第五項 内容臓器ニヨル分類

鼠蹊ヘルニア三八一例ハ觀血的ニ手術セラレタリ。而シテ其還納性ナル場合腸管ヲ内容トスル腸管ヘルニア、大網膜ヲ内容トスル大網膜ヘルニア、或ハ腸管大網膜ヲ内容トスル腸管大網膜混合ヘルニア等ニ於テハ、其手術ニ際シ仰臥位ヲ採ル爲自然還納シ、又ハ内容ノ損傷及ビ脱出ヲ防グ爲還納セシメテ手術ヲ行フヲ常トスルヲ以テ數的ニハ其調査不確タルヲ免レズ。滑出ヘルニア *Gleithernia* ニシテ卵巢ヲ内容トセル卵巢ヘルニア二例アリシモ、子宮ヲ内容トセル子宮ヘルニアハ見ラレザリキ。前記三八一例中嵌頓ヘルニア八一例二一・七八%アリ。其内容ニ就キテハ他種嵌頓ヘルニアト一括シ既ニ第四章第二節第三項ニ記載セリ。但シ前記八三例中盲腸ヘルニアニシテ嵌頓セルモノ一二例（嵌頓セザルモノ一例ヲ合シ、一三例三・六%）アリ。

第六項 ヘルニア内容ノ還納如何ニヨル分類

鼠蹊ヘルニア六九四例中還納性ヘルニア五八二例八三・八六%、不還納性（不動性）ヘルニア三例〇・四三%、嵌頓ヘルニア一〇九例一五・七一%ヲ算シ、嵌頓ヘルニア一〇九例中一例ハ未ダ手術セザルニ先ダチ虚脱ニ陥リ死シ、二五例ハ主トシテ整復術ニヨリ還納シ、八三例ハ觀血的ニ手術セラレタリ。

等二節 外鼠蹊ヘルニア合併症

外鼠蹊ヘルニア六二三例中四例〇・六五%ノ潜伏辜丸ヲ認メタルモ Carl Gaure 及 A. Borchard ハ四〇%ノ其合併ヲ有スト記載セリ。精系水腫或ハ陰囊水腫ハ同症例中九例一・四七%ヲ見タリ。

第三節 根治手術及ビ其終末結果

嵌頓鼠蹊ヘルニア八三例ヲ除ケル不還納性鼠蹊ヘルニア三例、嵌頓鼠蹊ヘルニアノ主トシテ整復術ニヨリ還納シタル二五例及ビ還納性ヘルニア二七〇例、計二九八例（男子鼠蹊ヘルニア二六四例及ビ女子鼠蹊ヘルニア三四例）ヲ主トシテ

第二十表

手術例數	再發時期	例數	再發時期再發百分率其他
一ヶ月以内	三	一	三年以内 一〇〇・〇〇
二ヶ月	一	一	二年以内 七三・三三
四ヶ月	一	一	一年以内 六〇・〇〇
六ヶ月	二	二	六ヶ月以内 四六・六七
一年	二	二	手術後再發間ノ平均 一〇・一三ヶ月
一年七ヶ月	一	一	二年以内 九・八六
一年十ヶ月	一	一	一年半以内 九〇・四
二年	一	一	一年以内 七三・九
三年	三	三	六ヶ月以内 四七・九
計	一五	一五	手術再發間ノ平均 七・一ヶ月 最長 二年七ヶ月

備考 一、嵌頓ヘルニア八三、經過不明一二、及ビ手術後死亡二、計九
七例ニ係ル事實ハ本表外トス。

モ多ク約半数ヲ占メ手術後三年間經過ヲ監視スルノ要アリ。

嵌頓ヘルニア八三例（男子鼠蹊ヘルニア七五例女子鼠蹊ヘルニア八例）亦主トシテ Bassini 氏法ニテ手術セラレタルガ、手術後死亡七例三八・四三%、再發一〇例一三・一六%（女子鼠蹊ヘルニアニ再發ナシ）治癒六六例七九・五二%トシ、再發一〇例中其再發時期一ヶ月以内二例、二ヶ月二例、三ヶ月一例、五ヶ月一例、六ヶ月二例、一年一〇ヶ月一

Bassini 氏法、大正九、十年當時稀ニ三輪氏法、女子鼠蹊ヘルニア一例 Cerny 氏法ニ據リ手術セラレタルガ、手術後死亡二例〇・六七%（共ニ小兒ニシテ其死因一ハ急性汎發性腹膜炎、他ノ一ハ滿二歳ナルガクロロフォルムニ因ル麻醉死トス）、經過不明一二例、再發一五例五・二八%（男子鼠蹊ヘルニア一三例四・九六%女子鼠蹊ヘルニア二例五・八八%）、治癒二六九例九〇・二七%トシ、創始者タル Bassini 自身二五一例中七例二・八%ノ再發ヲ見、近年ニ於テ Bassini 氏法ニ據リ手術セラレタルモノ、ウチ、Ahrens ハ一七五例中一〇%、Erdman, Seward ハ九七八例（男子）中七三例七・四六%、Coley, B. L. ハ七七〇例中四九例六・三五%ノ再發ヲ示シ、遂次再發率ノ減少ヲ認ム。再發ノ時期ニ關シテハ第二十表ニ記載セルガ如ク手術後六ヶ月以内再發最

例、二年一例ナリトス。

手術セラレタル鼠蹊ヘルニア三八一例中左側一四四例右側二三七例ニシテ其比一對一・六五即チ右側ハ左側ノ一・六五倍ニ相當ス。

滿一年以内ノ小兒ニ於ケル鼠蹊ヘルニア手術ニ關シ余ノ調査セル二九例（笹頓ヘルニア一七例ヲ含ム）中死亡一例三・四五%（笹頓ヘルニアニテ腸壞疽ヲ起シタルガ爲腸切除ヲ行ヒタルモノ）、再發一例三・五七%。治癒二七例九三・一〇%ヲ算シ、Ester, Josef ハ八五例（笹頓ヘルニア一四例ヲ含ム）中死亡二例二・三五%、經過不明二例、再發一例一・二三%、治癒八〇例九二・八〇%ヲ計上シ、又 E. Gohrbandt ハ一五〇例中死亡二例一・三三%（共ニ笹頓ヘルニア）治癒一四八例九八・六七%ナリキト報ゼリ。其他近時諸家ニヨリ一歳以内ノ乳兒ニモ亦根治手術ヲ推奨セラルルニ至レリ。Sheen, A. W. ニ據レバ小ヘルニアノ手術後ニ現ハル、再發ノ主ナル原因トシテ外鼠蹊ヘルニアニ在リテヘルニア嚢ガ充分高キ部位ニ結バレズ、或ハ小ヘルニア嚢又ハ同時ニ存スル内鼠蹊ヘルニアガ看過セラル、ニ因ル。化膿ガ再發ノ原因トナルハ稀ナリ。

第七章 股ヘルニア

第一節 男女兩性別及ビ左右別

股ヘルニアニ〇例中男子四例女子一六例ニシテ其比女子ハ男子ノ四倍ニ相當シ、Wulstein ハ其頻度女子ハ男子ノ二乃至三倍ナリト云フ。Carl Garre 及 A. Borchard ニ據レバ女子ハ男子ノ六・四乃至一一倍ナリト報ゼリ。前記二〇例中左側九例右側一一例ニシテ亦右側ニ多ク兩側ニ發シタルモノナシ。

第二節 根治手術及ビ其終末結果

股ヘルニア一五例（還納性ヘルニア六例、不還納性ヘルニア二例及ビ笹頓ヘルニア七例）中手術後死亡二例一三・三三%（共ニ笹頓ヘルニア）再發二例一五・三八%（共ニ笹頓ヘルニア）、治癒一一例七三・三三%アリ。其再發時期ハ三ヶ月一例及ビ一年一〇ヶ月一例是レナリ。

E. Groves 及 W. Heg 其二三例中死亡一四・三五%、再發一例四・五五%ヲ報告シ、Carl Garre 及 A.

Borchard ニ據レバ手術後ノ再發率ハ五乃至七%ナリト云フ。前記箠頓股ヘルニア七例中死亡二例二八・二八%、腸壁壞疽ニ陷レルモノ五例七一・四三%、腸切除ヲ行ヒタルモノ四例(内死亡一例二五%)五七・一四%ヲ算ス。Graser ニ據レバ箠頓股ヘルニア七五例中死亡一一例一四・六七%、腸壁壞疽ニ陷レルモノ二四例三二%、腸切除ヲ行ヒタルモノ二四例(内死亡八例三三・三三%)三二%、E. M. Corner ニ據レバ箠頓股ヘルニア一三三例中死亡八八例六六・一七%、腸壁壞疽ニ陷レルモノ一二例九・〇二%、Becker, Anton ハ箠頓股ヘルニア三六例中死亡八例二二・二二%アリキト報告セリ。

第八章 臍ヘルニア

臍ヘルニア一六例中先天性臍ヘルニア(臍帶ヘルニア)一例及ビ小兒臍ヘルニア一五例ヲ算ス。臍帶ヘルニアハ八ヶ月ニテ生レタル女性生後直チニ箠頓シ、三日目ニ手術ヲ受ケ内容トシテ肝、小腸及大腸ヲ藏シ術後死亡セルガ、小兒臍ヘルニア中七例ハ他種ヘルニアニ合併シ發病シタルモノニテ、小兒臍ヘルニアニシテ觀血的ニ根治手術ヲ受ケタルモノナシ。Ritterhaus ハ一九〇七年マデニ手術セラレタル臍帶ヘルニア九四例中死亡二九例三〇・八五%アリキト報告シ、且ツ切ニ即時手術ヲ推奨セリ。Finsterer ハ生後六時間以内ニ於ケル六例ノ手術中死亡例ナク、Carl Garre 及 A. Borchard ハ生後二四時間以内ノ手術ハ四〇%ノ死亡率ヲ出シ、Mayer, A. ハ分娩五〇〇〇例中其五例ヲ觀察シ而シテ手術ニヨリ四例八〇%治癒シタリト報ジ、Löttersen ニ據レバ保守的療法ニヨリ六五乃至七〇%ノ死亡率ヲ來スト云フ。

第九章 腹ヘルニア

腹癥痕ヘルニアヲ除ケル腹ヘルニア七例中白線(上腹)ヘルニア三例、側腹ヘルニア四例ヲ有ス。白線ヘルニア中 Melchior, Eduard ノ分類ニヨル第二型(眞性上腹ヘルニア)ハ只一例ノミ。同氏ニヨレバ兩定型ノ中間階級タル所謂 Hernia en point ハ男子ノ略々五〇%ニ存シ、而シテ男女ノ比ハ其頻度一〇對一ナリト。前記三例共何等自覺症ナク、Liwisohn, Richard ノ報告ニ於ケルガ如キ上腹ヘルニアト腹内臓疾患トノ同時ニ成立セルモノヲ認ムル能ハザリキ。側腹ヘルニア四例中其好發部位タル Spiegel 氏半月狀線ニ一致セルモノハ只一例ニシテ、他三例中二例ハ左乳線ニ

近く、一例ハ右乳線ニ近く各其ヘルニア門ヲ有セリ。

A. Süßner ハ其四一例中二三例ニ於テ Spiegel 氏半月狀線ニヘルニア門ヲ有スル側腹ヘルニアニ就キ報告セリ。
側腹ヘルニア四例何レモ根治手術ヲ施サレタルガ、同症例中一例二五%約六ヶ月ニシテ再發セリ。

第十章 會陰ヘルニア

會陰ヘルニア一例アリ。右側ニシテ箠頓セルモノナリシガ、箠頓後二日半ヲ經過シ手術ヲ行ヒ、内容タル廻腸下部壞疽ニ陥リ腸切除ヲ行ヒシモ既ニ急性汎發生腹膜炎ノ徵ヲ呈シ術後死亡ス。由來會陰ヘルニアハ稀有ナル症例ニシテ解剖學的形態的ニ確實ナルモノハ甚ダ尠シ。Köppel ニヨリ集メラレタル二六例中九例ハ箠頓セルモノナリキ。

第十一章 内ヘルニア

内ヘルニア一例アリ。其種別盲腸後ヘルニアナルガ箠頓セルモノニシテ、箠頓後既ニ二日ヲ經過シ手術シタルガ、内容タル廻腸下部壞疽ニ陥リ腸切除ヲナシ横行結腸ト側々吻合ヲナセシモ、術後約四時間ニシテ虚脱ニヨリ死亡ス。元來内ヘルニアモ亦稀有ナル症例ニシテ、Carl Garre 及 A. Borchard ニ據ルハ其頻度、1. Hernia foraminis Winslowii (Hernia bursae omentalis), 2. Hernia duodeno-jejunalis (Tritzi), 3. Hernia Coecalis, 4. Hernia intersigmoidica, 5. Hernia perivesicalis ノ順ナリト記載シアルモ、Hans Gollwitzer ハイレウスニ二三例中内ヘルニアトシテ廻盲ヘルニア Hernia ileocecalis 四例一・七九%ヲ有スルノミト報告セリ。

第十二章 大腸滑出ヘルニア Dickdarmgleitbürche

第二ニ表ニ示スガ如ク鼠蹊ヘルニア手術三六一例中大腸滑出ヘルニア一三例三・六〇%アリ。股ヘルニア一五例中之ヲ認メズ。同一三例中男子一二例女子一例ナリ。年齢ヨリ觀察スルニ一歳三例、二歳二例、三歳五例、五歳一例、一五歳一例及七八二歳一例ニシテ、大人一例七・六九%、小兒二二例九二・三二%ナルガ、小兒ニ於ケル箠頓數一一例九一・六七%ナリ。而シテ小兒一五歳一例ハ非箠頓(内容トシテ廻腸下部盲腸及ヒ蟲樣突起)ナリシモ他ハ總テ箠頓ヘルニア

第 二 十 一 表

年次	氏名	性	ヘルニア 發病年齡	手術年齡	病名	大腫瘍 サソ	内 容	手術式	終末結果	摘 要
大正十年	黒○龜○	♂	先天性	九ヶ月	左袈頓 陰囊ヘルニア	鷲卵大	盲腸	Bassett氏法	癒	續發性、觀血的 ニ整復
同 年	飯○節○	♂	四ヶ月	二 歳	左袈頓 陰囊ヘルニア	鷲卵大	盲腸、蟲様突起 廻腹下端	前 同	癒	原發性、觀血的 ニ整復
同 年	増○友	♀	先天性	五 歳	右袈頓 鼠蹊ヘルニア	—	盲腸	前 同	癒	續發性、觀血的 ニ整復
同 年	松○近○	♂	七二歳	八二歳	左袈頓 陰囊ヘルニア	手拳大	廻腸下部特ニ下 端	前 同	癒	前 同
同十一年	石○平○	♂	二 歳	三 歳	右袈頓 陰囊ヘルニア	鷲卵大	盲腸	前 同	癒	前 同
同 年	黒○禎○	♂	先天性	三 歳	右袈頓 陰囊ヘルニア	大鷲卵大	盲腸、蟲様突起 廻腸下部	前 同	癒	前 同
同 年	向○正○	♂	二ヶ月	四 歳	右袈頓 陰囊ヘルニア	大手掌大	盲腸	前 同	癒	前 同
同 年	柴○忠○	♂	先天性	二 歳	右袈頓 鼠蹊ヘルニア	鷲卵大	盲腸	前 同	癒	前 同
同十三年	小○仁	♂	二 歳	三 歳	左袈頓 陰囊ヘルニア	鷲卵大	盲腸、蟲様突起	前 同	手術後略々六 ヶ月ニテ再發	前 同
同十五年	村○唯○	♂	生後 直ニ	三 歳	右袈頓 陰囊ヘルニア	大鷲卵大	盲腸、廻腸	前 同	癒	前 同

第 二 十 二 表

報 告 者	ヘルニア 總 數	大腸滑出 ヘルニア 例 數	同百分率
Brenner	3,000	52	2.00
Sprengel	800	13	1.60
V. Schmarda (Gussenbauer)	822	4	0.50
Goldner	800	2	0.25
Bundschuh	231	1	0.43
Dubujadaux	317	2	0.63
Petrovic	1,325	14	1.05
V. Assen (Lans)	100	1	1.00
Judd	1,652	14	0.85
計	10,047	110	1.10

ナリ。ヘルニア發病年齡ヲ調ブルニ嚴正ナル意義ニ於ケル先天性六例、生後直チニ一例、二ヶ月一例、四ヶ月一例、六ヶ月一例、二歳二例及ビ七二歳一例ニシテ續發性大腸滑出ヘルニア一二例中其絞頓セル一例ハヘルニア内容脱出シ且ツ絞頓症狀發起後其經過時間(日數)五時間一例、一六時間一例、一七時間一例、二二時間一例、二日四例、三日一例、五日一例及ビ七日一例ナルガ、此等各症例ハ其以前還納性ヘルニア換言スレバ大腸滑出ヘルニアニアラザリキ。

大腸滑出ヘルニアヲ左右別ニナスニ左鼠蹊ヘルニア一四一例中五例三・五五%、右鼠蹊ヘルニア二二〇例中八例三・六四%ニシテ其發生比率右側ニ稍々多シ。

ヘルニア内容ヲ調査スルニ、廻腸下部特ニ下端一例、廻腸下部及ビ盲腸一例、廻腸下部盲腸及ビ蟲様突起四例、盲腸及ビ蟲様突起一例、盲腸五例ナリトス。手術ハ觀血的ニ還納後總テ Bassini 氏法ヲ用ヒ、術後一三例中一二例治癒シ只一例略六ヶ月ヲ經テ再發セリ。

文献ニ徵スルニ、阿部氏ニ據レバ鼠蹊ヘルニア手術五〇三例中盲腸ヘルニア二七例五・三%ニシテ、該數中

同 年	同 年	同 年
古○文○	佐○恒○郎	菅○和
○	○	○
先天性	先天性	六ヶ月
一五歳	一ヶ月	二歳
陰囊ヘルニア	左絞頓 陰囊ヘルニア	右絞頓 陰囊ヘルニア
小兒頭大	雞卵大	手拳大
廻腸	盲腸、蟲様突起 廻腸下部	盲腸
前	前	前
同	同	同
治	治	治
癒	癒	癒
前	前	前
同	同	同

二二例八一・五%ハ不還納性就中嵌頓性症ナルガ、爾餘ノ五例一八・五%ハ嵌頓セザル還納性症ナリ。同二七例中二例ニ於テノミ二〇歳代ノモノニシテ爾餘ノ二五例九三・六%ハ悉ク一〇歳以下ノ小兒ナリ。而シテ左右鼠蹊ヘルニアニ於ケル盲腸ヘルニアノ頻度ハ、左側一六九例中一〇例五・四五%、右側三一三例中一七例五・四四%ニシテ左右側發生比率殆ンド相等シト。澤村博士ハ其報告セラレシ九例悉ク小兒ニ見、又前防氏ハ外鼠蹊ヘルニア四八例中盲腸ヘルニア二例四・一七%ヲ發見シタルヲ報ゼリ。尙大腸滑出ヘルニア發生頻度ニ就キ泰西ノ諸統計ハ第二二表ニ示セルガ如クニシテ、如何ニ本邦人ニ同滑出ヘルニアノ罹病率著シク多キヤヲ知ルベシ。

第十三章 總括

I. Leiser ハヘルニア全數ノ三分ノ一ニ於テ其發病ニ遺傳ヲ證明セラルトナシ、Beger ハ其二七・五七%ニ於テ、余ハ其二二・二五%ニ遺傳的關係アルヲ認メ、而シテ M. zur Verth ニ據ンバ重力的ヘルニア Senkbruch ハ體質的疾(結締組織衰弱型體質)ニシテ遺傳性ヲ有ストナシ、余ハヘルニア患者ノ血族中ヘルニアニ罹病セルモノヲ調査シタルニ、重力的ヘルニアヲ有スル四七四人ノ血族ニ於ケルヘルニア罹病者ノ數ハ、動力的ヘルニア Gewaltbruch ヲ有スル一四八人ノ血族ニ於ケル夫レニ比シ其罹病比率著シク多ク三倍強ニ達セルヲ見、且ツ前者ニ於テハ其血族中往々數名ノヘルニア罹病者ヲ見タルコト尠シトセズ。

II. 余ノ鼠蹊ヘルニア六八六例ニ係ル發病年齡調査ニ於テハ第一歳以內ノ發病四五・六三%ヲ算シ、Griser ノ第一歳ニ於ケル發病七分ニ對シ其比率著シク少シ。余ノ調査セル股ヘルニア二〇例ニ係ル平均發病年齡ハ四三・四年ナリ。

III. 本邦人ノ兩側ヘルニアハ歐米人ノ夫レニ比シ甚ダ少ク雲泥ノ差アリ。

IV. 動力的ヘルニアハ余ノ調査セル七三六例中二四・七三%ニシテ、Beger ノ三〇・八%ニ比シ著シク尠キモ、災難又ハ不運ヘルニア Unfallbruch ハ之ニ反シ甚ダ多ク、余ノ調査セル動力的ヘルニア一八二例中一六・四八%ニシテ、Beger ノ六乃至七%ニ比シ約二倍半ニ相當ス。

V. 獨乙國保險裁判所ニ於テ採用セラレアル成因ニ據ルヘルニア分類法ハ Paalzow 氏分類ニ基キ、Risbruch, Press-bruch 及 Senkbruch ノ三種ニ分類セラレアルガ、Verth ハ此分類法ヲ以テ不當ナリトシ次ノ如ク立案セリ。

(一) 除外のニ動水學的作用ニ因ツテ成立シタル下腹ヘルニア (二) 動水學的及び靜水學的作用ニ因ツテ成立シタル下腹ヘルニア、(三) 主トシテ靜水學的作用ニ因ツテ成立シタル下腹ヘルニア是レナリ。余ノ調査シタル七三六例中(一)ハ四・〇八%、(二)ハ二二・六五%、(三)ハ七五・二八%ヲ算ス。W. B. Coley (米)ニ據レバ(一)及ビ(二)ハ三〇%、(三)ハ七〇%ヲ有シ、Graser (獨)ニ據レバ(一)ハ一%、(二)ハ九%、(三)ハ九〇%ヲ計上ス。

六、用意周到ナルヘルニア帶ノ裝用ハヘルニア箠頓特ニ糞便性箠頓ヲシテ尠ナカラシム、余ノ調査セル箠頓ヘルニア一〇五例中、其箠頓當初ニ於ケル箠頓機轉ヲ其發生原因ニ從ヒ分類スルニ、主トシテ糞便性箠頓ト認ムベキモノ五三例、彈力性箠頓ト見ルベキモノ五二例ヲ算シ、其數略々相伯仲ノ間ニ在リ。

七、余ノ調査セルヘルニア箠頓一一九例中秋季ニ最も多ク、冬季之ニ亞ギ、春季最も少ナカリキ、而シテ箠頓ヘルニア手術八六例中箠頓後一二時間未滿ノ症例ニ於テハ内容臟器ニ壞疽ヲ起セルモノナク、二日未滿ノ症例ニ在リテハ死亡ナシ、又箠頓ヘルニアニ於テ遭遇セル死亡ノ死因中虛脱ニテ致死セルモノ最も多ク、余ノ調査セル箠頓ヘルニア手術九三例中手術後死亡一二例及ビ Lukesona 報告同手術後死亡三一例ニ於テ其半數以上ヲ占ム。

八、主トシテ姑息的療法ニ附シタルヘルニア二九〇例中七八例四二・四一%ニ於テ一時的治癒ヲ見タリ。

九、非箠頓性ヘルニア三一〇例根治手術ヲ施サレ手術後經過ヲ觀察セラレタル其二九六例中再發一六例五・四一%ヲ算シ、亦箠頓ヘルニア九三例ニ根治手術ヲ行ハレタルガ、手術後經過ヲ觀察セラレタル其八一例中再發一二例一四・八一%ヲ計上シ、兩者ニ於ケル再發ヲ通算スルニ二八例七・四三%ナリ。Coley, B. L.ニ據レバ主トシテ非箠頓性ヘルニア手術後ノ再發六・八%ヲ示ス。

其他箠頓鼠蹊ヘルニアニシテ緊急手術 Totoperation ヲ行ヒタルモノヲ除ケル鼠蹊ヘルニア二九八例ニ主トシテ Bassini 氏法ニ據リ根治手術ヲ施サレタルガ、其經過ヲ觀察セラレタル二八四例中再發一五例五・二八%ニシテ、歐米先進國ニ於テ行ハレタル二三諸家ノ報告セル同根治手術成績ニ比シ其再發率少シ。

一〇、内鼠蹊ヘルニアハ米國人ニ著シク多ク、獨乙人及ビ本邦人ニ遙カニ少ナキガ如シ。

一一、余ノ調査セル女子鼠蹊ヘルニア七一人中左側三八人、右側二九人、兩側四人ニシテ左側ニ多ク、其左右側發生

ノ比一・二七對一ナリ。

一二、本邦人ハ泰西人ニ比シ先天性外鼠蹊ヘルニア著シク少ナキガ如シ。

一三、J. Esten 及び E. Gohbandt ノ報告ニ於ケルガ如ク、余ノ調査セル滿一年以内ノ小兒ニ於ケル鼠蹊ヘルニア二九例(鼠蹊ヘルニア一七例ヲ含ム)ニ係ル根治手術實施終末結果ハ、同症例ヲ除ケル鼠蹊ヘルニア二五二例(鼠蹊ヘルニアヲ含ム)ノ同調査(手術後死亡八例二・二七%、經過不明一二例、再發二四例七・二三%、治癒三〇八例九〇・五九%)ニ比シ再發ノ遙カニ少キ點ニ於テ手術成績良好ナリ。

一四、大腸滑出ヘルニアハ其頻度本邦人ハ泰西人ニ比シ著シク多シ。

摺筆ニ臨ミ恩師瀨尾教授並ニ石川助教授ノ懇篤ナル御指導及ビ御校閲ノ勞ヲ深謝ス。

文 献

- 1) **Wilms**; Schlafte Darmsenkung bei Hernien. Beiträge zur klin. Chirurg. Bd. 50. H. 2. 1906. 2) **G. Filippini (Brescia)**; Esperienza di due mila operazioni nella cura radicale delle ernie. Clinica chirurgica. 1906 Nr. 3. 3) **N. W. Kopylow**; Ueber inkarnierte Hernien. Russ. Archiv für Chirurgie. 1907 (Russisch.) 4) **W. B. Coley**; Industrialaccidents in relation to the development of Hernia. Intern. journ. of surgery. 1908 February. 5) **E. M. Corner**; The treatment of gangrene in strangulated Hernie at the St. Thomas Hospital. Lancet. 1908 June 13. 6) **Lindenstein**; Zur Lehre von der Hernia epigastrica. Beiträge zur klin. Chirurgie. Bd. 57. 1908. 7) **A. Stühmer**; Ueber die Hernien der Bauchwand seitlich der Mittellinie unter besonderen Berücksichtigung der Hernien der Linea semilunaris (Spiegelii). Bruns' Beitr. zur klinische Chir. Bd. 66. H. 1. 1910. 8) **E. Leser**; Spezielle Chirurgie in 60 Vorlesungen (Neunte Auflage). 9) **Downes William A.**; Management of direct inguinal Hernia. Arch. of surg. Vol. 1. No. 1. 1920. 10) **Ahrens**; Beitrag zur Verleserung der Radicaloperation von Leistenbrüchen mit besonderer Berücksichtigung der Rezidivoperationen. Erfahrungen an 175 Fällen. Münch. Med. Wochenschr. Jg. 67. Nr. 50. 1920. 11) **Esten Josef**; Ueber die Erfolge der Leistenbruchoperation bei Kindern u's zu zwei Jahren. Bericht über 101 Fälle aus der chirurgischen Klinik zu Bonn von 1909-1919. Deutsch. Zeitschr. f. Chirurg. Bd. 160. H. 1/2. 1920. 12) **Hoguet, P. J.**; Direct Hernia, Discussion, Ann. of surg. Vol. 72. No. 5. 1920. 13) **Hoguet, J. Pierre**; Direct inguinal Hernia. Ann. of surg. Vol. 72. No. 6. 1920. 14) **Negroni, Giacchino**; Dell'ernia inguinale diretta nella donna (Osp. magg., Milano). Ops. magg. Sez. B. Jg. 8. Nr. 12. 1920. 15) **Cignozzi Oreste**; Su 15 casi di resezioni intestinalis perancena da ernie strozzate (Osp. Grosseto). Policlinico, Sez. Chirurg. Bd. 27. H. 7. 1920. 16) **Meischor, Eduard**; Die Hernia epigastrica. Ergeln. d. Chirurg. u. Orthop. Bd. 13. 1921. 17) **Scheen, A. W.**; Recurrenthernia: The operation

- for its cure. *Lancet*, Vol. 200, No. 15, 1921. 18) **Mayer, A.**: Ueber Nabelschnurbrüche. *Fortschr. d. Med.*, Jg. 38, Nr. 9, 1921. 19) **Köhl, Hermann**: Ueber die epigastrische Hernia. *Schweiz. Med. Wochenschr.*, Jg. 51, Nr. 24, 1921. 20) **Lewisohn, Richard**: The importance of a thorough exploration of the intrabdominal organs in operations for epigastric Hernia (Mort sinoe Hosp. a Beth Israel Hosp., New York). *Surg. Gynecol. a Obstet.*, Vol. 32, No. 6, 1921. 21) **Eckes, Fritz**: Der Gleichmuth des Darmes. *Ergab. d. Chirur. u. Orthop.*, Bd. 13, 1921. 22) **Sawyer, Charles F.**: Acute partial enterocoele. *Surg. Gynecol. a. Obstet.*, Vol. 33, No. 1, 1921. 23) **Niedlich**: Erfahrungen und Resultate bei operierten Leistenhernien (Knappschaffs-Krankenh. Fischbachthal). *Deutsch. Zeitschr. f. Chirurg.*, Bd. 165, H. 1, 2, 1921. 24) **Histey, Edward H.**: Sliding Hernia. *Boston Med. a. surg. Journ.*, 1921. 25) **Gervasio, Luigi**: Enria crurale paenescodare intravaginale ed enria crurale comme omologa. *Arch. ital. di Chirurg.*, Bd. 3, H. 1/2, 1921. 26) **Lukesona**: Incarcerierte gangränöse Hernien im Deutschthöder Krankenhaus 1898-1920. *Casopis lekarny ceskych.*, Jg. 60, Nr. 32, 1921. 27) **Franz Rost**: Pathologische physiologie (Zweite Auflage). 28) **Garl Garre und A. Borchard**: Lehrbuch der Chirurgie (Fiferte Auflage). 29) **Becker, Anton**: Ein Beitrag zur Behandlung der gangränösen Schenkelhernie (Städt.-Krankenh. Worms). *Deutsch. Zeitschr. f. Chirurg.*, Bd. 176, H. 4, 1922. 30) **Wallstein u. Kuttner**: Lehrbuch der Chirurgie. Achte Auflage (1922). 31) **Erdmann, Seward**: Inguinalhernia in the male late results in 978 traced cases (Sec. surg. div., New York Hosp.) *Ann. of surg.*, Vol. 77, No. 2, 1923. 32) **A. Beyer**: Hernienrezidive nach Bassini. *Inaug.-Diss.*, Bonn, 1923. 33) **Kosgrew, A. A.**: Ueber Darmwandhernien (Chirurg. Klin. Prof. W. I. Rasmowsky, Saratow). *Wesnik Chirurgii i pognatitschny Oblastei*, Bd. 3, H. 7, 1923. (Russisch.) 34) **Alipow, G.**: Zur Klinik eingeklemmter Hernien (Krankenhaus des Rotenkranzes in Pens., Dir. W. Trofimoff). *Nowy chirurgitscheski Archiv.*, Bd. 3, H. 1, 1923. (Russisch.) 35) **Gohrbandt, E.**: Bemerkungen zur Arbeit von Dr. H. Maass. *Klin. Wochenschr.*, Jg. 2, Nr. 14, 1923. 36) **Garre, Kuttner und Lexer**: Handbuch der praktischen Chirurgie (Fünfte Auflage). 37) **Coley, B. L.**: Three thousand consecutive Hemionemias. *Annals. surg.*, Vol. 80, 1924. 38) **Freiliss, J.**: Zur Frage der Entstehung der Dickdarmlentbrüche. *Zent. Chir.*, Bd. 52, 1925. 39) **Ritter, G.**: Weitere Beiträge zur Brucherklennung. *Deut. Zeit. Chir.*, Bd. 193, 1925. 40) **Verth, M. Zuv**: Entstehung und Einteilung der Leistenbrüche unter besonderer Berücksichtigung ihrer Begutachtung. *Deut. Zeit. f. Chir.*, Bd. 197, 1926. 41) **Gollwitzer, Hans**: Statistik über 223 Ileusfälle. (*Chir. Uni. Klinik Greifswald*) *Deut. Zeitschr. für Chirurg.*, Bd. 197, H. 1/6, 1926. 42) 三輪外科叢書第十四篇 鼠蹊部脱肛症. 43) 村主丑太郎: 岡山縣立病院外科ニ於ケルヘルニア調査第二回報告. 岡山醫學會雜誌. 第204號. 44) 前防玄道: 外鼠蹊ヘルニア. 74例ニ於ケル根治手術. 宇野博士還暦祝賀論文集. 45) 四戸昇: 獨逸ニ於ケル婦人ヘルニア發生年齡ニ就テ. 福井月報. 第1卷. 第12號. 46) 杉寛一郎: 滑出ヘルニア. 實驗醫報. 第5年. 第56號. 47) 中山茂樹: ヘルニア手術ニ就テノ統計的觀察特ニ小兒ヘルニアニ對スル現今ノ趨勢. 48) 阿部四郎: 盲腸ヘルニア. 27例ニ就キテノ臨床的觀察. 京都府立醫科大學雜誌. 第100號.